



JIC インフォメーション

第 199 号 2019 年 1 月 10 日

年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行

1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪市中央区谷町 2-7-4 谷町スリースリースビル 7F TEL: 06-6944-2341

ロシア 旧ソ連 国際 交流 誌

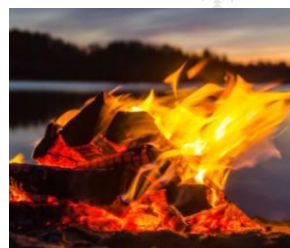
はりねずみのジェーニャ



あけましておめでとうございます

本年も ^{ジェーアイシー} JIC をよろしくお願いします!!

С НОВЫМ 2019-ым Годом!!



パートナーから届いた New Year Card より

<http://www.jic-web.co.jp>

日ロ平和条約交渉の進展を望む 伏田昌義 2P
 《JIC スタッフより新年ごあいさつ》
 テーマは「ロシアと私、私と日本」 3-15P
 第2回ロシア映画祭 in 東京 伏田 昌義 16P
 映画祭こぼれ話 「不思議な少女ドミニカ」字幕制作
 守屋 愛 17P

デルジャビン・インスティテュート 15 周年 荒川 好子 19P
 本の紹介「右ハンドル」 榎本 真奈美 20P
 コンサート: 前奏曲とフーガ ~ バッハから 20 世紀まで
 塩野 直之 22P
 丹波タンボフ交流協会 似た名前きっかけに交流 23P
 キルギス日本語教師募集中 24P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
 年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

日ロ平和条約交渉の進展を望む！

昨年 11 月 14 日、シンガポールでプーチン大統領と首脳会談を行った安倍首相は、「平和条約締結後に歯舞群島と色丹島を日本に引き渡すと明記した 1956 年の日ソ共同宣言を基礎として、日ロ平和条約交渉を加速させることで一致した」と会談後に語った。これまで「四島一括返還」を一貫して掲げてきた日本政府の対ロ方針は、ここに「二島返還」へと明確に舵を切ったことになる。

安倍首相周辺からは、方針変更に対する親米保守派の強硬な反対論を緩和するために「二島返還プラスアルファ」という曖昧で希望的な説明がしきりに流されているが、第二次世界大戦の戦後処理を行ったサンフランシスコ講和条約と日ソ国交回復交渉の経過をつぶさに見れば、領土的な意味での「プラスアルファ」が幻想にすぎず、日ソ(日ロ)間の戦後処理は最終的に「二島返還」で手を打つか他に道がないことは明らかである。

日ソ共同宣言をもとに「二島返還」が交渉の出発点！

サンフランシスコ講和条約で日本が放棄した千島列島の範囲には国後、択捉を含む南千島が含まれると当時の吉田茂政権は批准国会で再三確認していた。日ソ国交回復交渉での日本政府の最低限の妥結条件は歯舞、色丹の二島までであった。したがって、フルシチョフが二島返還に応じると譲歩した時、鳩山一郎政権はまさに平和条約締結の入口に立っていたのである。これを阻止したのは、米ソ冷戦下で日本とソ連の接近を好まぬアメリカの強引な横やりだった。ダレス国務長官が「二島で手を打つなら沖縄は返さない」と重光葵外相を恫喝して、日ソ交渉の妥結を妨害したのはあまりにも有名な話だ。こうして、日本政府は共同宣言という形で国交回復せざるを得なくなり、米ソ冷戦下でソ連と決して妥結しない証として 1956 年以降に「固有の領土」論に基づく「四島一括返還」論が日本外務省によって作りだされ、それをもって国民世論を形成するに至ったのである。

しかし、それでも日ソ共同宣言はプーチン大統領が指摘する通り、両国の国会で批准された国際条約に準ずる唯一の外交文書であり続けた。したがって、日ロ平和条約交渉の基礎となる外交文書はサンフランシスコ講和条約と日ソ共同宣言以外にはなく、そこに「平和条約締結後にソ連(ロシア)は歯舞、色丹の二島を日本に引き渡す」と明記されている以上、交渉はこれをベースにする以外にはないのである。事実を偏見のない目で見れば、日本外務省の「四島一括返還」論が後付けに作られた『反対のための反対論』であり、領土問題の公正な解決を真摯に求めるものでなかったことは明らかである。その意味で、安倍政権にいたってようやく日本政府が日ソ共同宣言締結時の立場に立ち戻ったことは大いに評価すべきであると思う。

その上で、日本外務省・防衛省を中心に根強く巣食う「親米保守派」の妨害を排除して、平和条約交渉の進展を後押しするために、「二島返還」をベースとした日ロ協力の可能な未来像を具体的に描

き出しつつ、国民世論を変えていく必要がある。

日ロ交渉の前に日米交渉＝地位協定改定を！

日ソ共同宣言に明記してあるとはいえ、60 年前と異なり今日では「二島返還」ですらすんなりと妥結できるものではなくなっている。色丹島には戦後 70 年以上にわたって数千人のロシア人が住み続けている。島は彼らにとってすでに故郷となっており、仮に日本に引き渡されるとしても現にそこに住んでいる人々の生活をどうするのか、住み続けたい人たちがどう折り合いをつけて共生を図っていくのか、難しい課題が山積している。しかし、経済活動や社会生活に関わる課題、それに付随する政治的・行政的課題の解決は時間をかければ何とか解決の道を見つけることができるだろう。

最大の問題はやはり軍事・安全保障問題である。プーチン大統領が指摘しているとおり、返還後の二つの島の軍事的位置付けが問題であって、現行の日米安保条約、日米地位協定のもとでは、アメリカ軍は日本の施政権下にある地域の、どこでも、いつでも軍事活動を展開する権限を持っている。歯舞、色丹を日本に引き渡した途端そこに米軍が展開する事態になったのではロシアにとって堪ったものではない。したがって、ロシア側が二島を日本に引き渡してもよいと軍事的に安心できる条件を作らない限り、日ロ交渉はまともでない。日ロ交渉の前にまず日米交渉＝日米地位協定の改定交渉が必要になる道理だ。要は、日ロ平和条約交渉の成否は、安倍政権がアメリカと腹をくくって交渉し、歯舞、色丹の二島を日米地位協定の例外として非軍事化できるかどうかにかかっている。「二島プラスアルファ」がもしあるとすれば、私は日米地位協定の改定ないし例外規定の条文化こそが日本にとって非常に大きな「プラスアルファ」になりうると考える。

沖縄のためにこそ「二島返還」実現を！

部分的にせよ日米地位協定の改定が成るとするならば、それはサンフランシスコ講和条約の締結と同時にこっそり日米安保条約が結ばれて、戦後 70 年以上の長きにわたって日本を縛り続けてきたアメリカ軍の占領状態から 1 歩でも 2 歩でも脱する大きな展望が開かれることを意味している。米軍普天間基地の辺野古移設で、アメリカ軍からも日本政府からもいじめ続けられている沖縄の人々にとって、これほど大きな援護射撃はあるだろうか。私は、日ロ交渉で二島返還を実現することによって、日本の米軍基地の 7 割以上が集中する沖縄の苦しみを少しでも解決に向かわせることができるのではないかと期待している。

安倍政権には、沖縄のためにこそ、『二島返還』交渉、そのための日米交渉に全力で取り組んでもらいたいと思うものである。

私たちもまた、日ロ間の人的交流、経済交流、文化交流をより活性化することによって、日ロ関係の拡大と日ロ交渉の進展を下支えして行きたいと思う。本年もよろしくお願ひします。

伏田 昌義 (JIC 国際親善交流センター副会長)



JICスタッフより新年のご挨拶

「ロシアと私、私と日本」

謹賀新年！本年も JIC をよろしくお願い申し上げます。

※1 月号恒例のスタッフ新年あいさつです。今年のテーマは、「**ロシアと私、私と日本**」。ロシア・旧ソ連地域を専門に、旅行・留学をアウトバウンドとインバウンド両面で取り扱い、また文化交流にも取り組んでいる旅行社のスタッフとしては、(日本人スタッフは)ロシアに、(ロシア人スタッフは)日本に、それぞれの思い入れや特別の関心を持っています。しかし、「お題」と関係なく好きなことを書くのもまた JIC 流。テーマを外れて書き綴った身辺雑記も含めて、スタッフのロシアな新年あいさつをお楽しみください。

活発化するロシア航空会社の日ロ路線 増便の動き

成田ーウラジオ間は夏季デイリーに モスクワ路線も座席数大幅アップ！

杉浦 信也 (JIC 旅行センター)

昨年(2018)はワールドカップ・ロシア大会の開催、ロシアにおける日本年、日本におけるロシア年のイベントが年間を通して実施され行事・イベントが双方で催されました。

日本旅行業協会(JATA)は昨年 11 月の定例記者会見で官民提携による「日露相互交流拡大ネットワーク」を立ち上げ 5 年後の 2023 年の目標として訪露日本人 20 万人、訪日ロシア人 20 万人の計 40 万人をめざすことを発表しました。(訪露日本人 20 万人の内訳はロシア極東部が 5 万人、モスクワやサンクトペテルブルグなどヨーロッパ部が 14 万 3000 人、シベリア地方のイルクーツクとノボシビルスク 7,000 人。)

昨年、日本政府観光局(JNTO)の集計ではロシアからの訪日客は 1 月～11 月期間で前年度 23.6%増の 88,600 人、日本からロシアへの渡航者はロシア連邦観光庁が未だ今年度の発表をしていないために不明ですが、2017 年の 102,000 人並みとして日露双方で年間 20 万人に近づく見込みです。2023 年に双方で 40 万人という目標は 5 年で倍増をめざすという、かなり強気の目標設定となっています。

S7・シベリア航空は今春より成田ーウラジオストク路線を増便し現在週 4 便の運航から 7 月から 9 月のピーク期には週 7 便、毎日 1 便を運行させ、さらに昨年から就航された成田ーイルクーツク線(週 1 便)、成田ーノボシビルスク線(週 2 便)を今年も運行させます。また、アエロフロート・ロシア航空も現在、エアバス 330(座席数 302)を運行させている成田ーモスクワ路線



写真は、特徴的な黄緑の機体、S7・シベリア航空

にボーイング 777-300(座席数 402 席/ビジネスクラス 30 席、コンフォート 48 席、エコノミー 324 席)を投入し大幅な座席数の拡大を図っています。

現在、ロシア方面への旅行ではロシアビザ取得の煩雑さに加え渡航費用の割高さが目立っています。韓国、中国といった日本から 2 時間～4 時間圏のアジア諸国だと 2、3 泊であれば宿泊費も含めて 5～6 万円程度のツアーも多くありますが、同距離圏のロシア東方部への旅行は価格が 2 倍と大きな価格差が存在しています。

活発化するロシア航空会社の増便の動きにあわせて、ぜひ日系の航空会社にもロシア極東方面の路線に本格参入してほしいものです。価格やサービス面で日露の航空会社が競いあう中でこそ 5 年間で渡航者を倍増させるという目標に近づいていけることと思えます。

私とロシア

中林 英子 (JIC 東京)

私とロシアとの出会いは学生の頃ロシア語を学習し始めた時からです。当時はソビエト崩壊からロシアになり、まだ混沌として

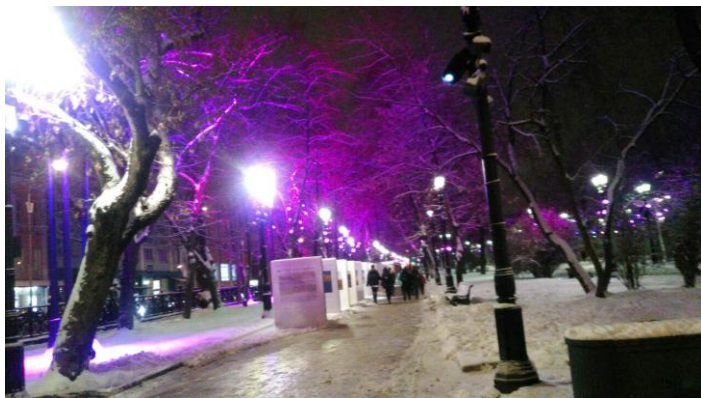
いた時代です。

ソビエトは崩壊しロシアになったとはいえ、それでもまだ、数年前までの共産国であって、ほとんど情報のない未知の国という印象がありました。入ってくる情報は最高峰の古典芸術やスポーツ選手の輝かしい活躍など、手の届かない遠くにあるものでした。良い部分しか見ていなく、憧れを持ってロシア語を学習しようと思ったのです。

ロシア語を学習しはじめ数年後、実際にロシアに行けるチャンスが来ました。初めての渡航は団体ツアーの一員だったので、渡航手配に手間取ったり、自分自身が渡航中に困ったりした思いをすることはなくスムーズな旅をしました。日本と比べると、不便に感じるロシアの生活でも異なった生活には興味深かったです。

そして数年後、私はモスクワに留学することを決めました。

その時、外国人として住むことの煩雑な手続きに悩まされました。当時、外国人留学生は、夏と冬の休暇以外はロシアから出国することができませんでした。出国ビザが必要ですぐに日本に帰りたいと思っても出国ビザの申請に 1~2 週間程度かかりました。モスクワからヨーロッパ諸国は近いので他の国も訪れてみたいと思っても、「あなたたち学生は勉強しにロシアに来ているのであって、遊びにきているのではない。ロシアに残って勉学に専念しなさい。」と大学から言われてしまいました。勉学のためにロシアにいるので当然のことですが、他国に行って自分の目で色々なものを実際に見ることは視野が広がるので、必要なことだったと思います。



ロシア冬景色

2019 年になった今でも入国時にビザが必要というだけでロシアは近くて遠い国という印象は拭いきれません。

昨年からは沿海地域には e-ビザで入国ができるようになり、少し行きやすくなってきました。FIFA ワールドカップの観戦の際はビザなしでの入国が可能でした。

私と同じ時期に留学していた韓国人のクラスメイトも、ビザで苦労していましたが、韓国人は一足早く、観光ビザは不要になりました。次は日本も。まずはトランジットもビザがなくなり、そしてビザなしでの渡航が可能になり、もっと自由に交流できることを願っています。

ロシアはまだ近くて遠い国

小西 章子 (JIC 大阪)

あけましておめでとうございます。昨年もたくさんの方にロシアへ旅行やロシア語留学に行っていただきました。お客様と接する中でたくさんの力や励ましをいただき、無事に平成最後の年を迎えています。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

昔から今に至るまで時々あることなのですが、ロシアに関する話をすると、「なんでまたロシア？ もしかしてロシア人の血が入



ってますか？」と聞かれることが結構あります。これは「ロシアあるある」でしょうか？ それとも私だけ・・・？

別に、誰にも理解を得られないようなマニアックな話をしているわけではありません。ごく一般的な、たとえば「ロシア旅行を扱う会社に勤めています」とか、「若いころロシアに 1 年留学していました」とか、「ロシアのスター・オックス

ウラジオストク、「トラの日」フェスのダンブラーは世界一可愛いって言われているみたいです」とか、そういった内容です。これがフランスに留学したとか、10 回以上旅行に行ったとか、マシュマロはフランスではギモーヴっていうとか聞いても、そこまで不思議だと思わないですし、ましてやフランス人の血が入っているとは思わないですよね。中国でもアメリカでもきっと同じです。

ではこれが例えば「南アフリカ」とか「カタール」だったらどうだろうと考えてみると、もしかしたらロシアと同じような反応が返ってくるかもしれません。「なぜあえて南アフリカ？」とか、「もしかしてそちらにルーツが？」といった感じで。これらの国々は日本から物理的にも距離があり、多くの日本人からするとよく知らない国、心理的に縁遠い国にあたるのではないかと思います。ということは、まだまだロシアも一般的には特殊な国、ちょっと近づきたい国と位置付けられているということになるのでしょうか。残念なこと、ロシアはたった 2、3 時間のフライトで行けてしまうのにもかかわらず・・・。

2014 年には冬季オリンピック、昨年はサッカーワールドカップと、世界規模のイベントが次々に開催され、少しずつ認知度は上がってきましたが、まだまだロシアについての明るい宣伝が

足りないのかもしれませんが。ロシアをより身近に感じてもらえるように、今年はたくさんの明るくて楽しくてロシアに行ってみたくなるような話題を本誌でご紹介できればと思います。(と、編集長に丸投げしておきます。笑)。



旅行手配で知るロシア

百瀬 智佳子 (JIC 東京)

新年おめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願い致します。

さてこの仕事をしていて楽しいなあ〜と思うことはいくつかありますが、お客様の手配や調べ物で学ぶことは大きいです。チケット手配でアーティストを知りました。各地の動物園の場所に詳しくなりました。室内スケート場を調べたり、野生馬の写真をいただいたり。結婚式の手配もありました。ご渡航目的だけでなく、例えばホテルについて、ご家族かお友達同士かななどによってお勧めも異なるので調べるうちに、ああまたこんな素敵なホテルが出来ている、サービスがさらに良く変わっている、、、など、あれこれと気付きます。ご帰国後にお話を伺うのも楽しく、日々新しくて様々な視点からの情報に触れさせていただいています。

ご趣味にしてもお仕事にしても、老若男女、とにかくいろんな立場の皆様が、「ロシアへの旅行」という切り口で集まっていられる。それが弊社です。

今年のご挨拶テーマは「ロシアと私」です。自分の目で見ると、お客様のご趣味を切り口として見る、WEB で見る、日々変わりゆくロシア。お陰様で私の中のロシアは様々な顔を持ち、イメージが四次元的に広がっています。

変わりゆくロシアと言えば、、、上の写真はロモノソフ工場のツリガネソウのデザインのティーセットの一部です。購入したのはもう20年ほど前のこと。今でも売られています。当時は基本のデザインが少なかったせいか、いろんな場所で見かけました。当時のロシアは物価が安く、折角だから良いカップを買って帰ろうと本店に出かけた私。しかし高めのカップは妙に金びかで、手書きとはいえ幾何学模様が不思議にゆがんでいる。直線がジ

モジモ〜っとしている。ロシアはこういうことがよくありました。遠目には壮麗な建物でも壁際で見るとかなり塗りが雑だなっという。今思えば大変面白い深いとも言えるのですが、その時の私は却下し、その代わり日本では(私は)生涯買わないだろうフルセット、、、しかし幾何学模様カップ1つより安価でカワイイセットを購入したのでした。

リュックひとつで行ったくせに巨大なダンボール箱を引きずりながら帰った重〜い思い出とともに、物価が安かったなあ、本店でも店員さんはちょっとやぼったかったなあ、あの頃はおしゃれな店は少なかったなあ、、、などなど、いろんな記憶を呼び起こしてくれる記念品です。

ТОВАРИЩ!

五十嵐 真夕 (JIC 東京)

明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

2006 年、JIC に一緒に入社したのは5人。ひとり去り、ふたり去り...最後の同期メンバーだった鶴田さんが昨年退職し、2006 年入社のスタッフはついに私ひとりとなりました。

Yさん、Sさん、今でも仲良くしてくれてありがとう。おふたりとはきっと一生このままの仲でいられるでしょう。ほぼ毎日の LINE やスカイプでのやり取りに、私は本当に救われています。

Dちゃん、今では立派な JIC のパートナーですね。時々お会いできるので嬉しく思っています。

Fさん、今どこで何をしていますか。お元気ですか。Fさんは私のことを「若造」と呼んでいましたね。若造だった私も立派なアラフォーです。



そして鶴田さん。入社直前から今まで、本当にお世話になりました。最初は東京と大阪で距離があったけど、勤務時間中にこっそりメッセージで愚痴を言い合ったり、悩みを聞いてもらったり、アドバイスをもらったり、すぐに話したい時には電話もして

...本当に色々な話をしたよね。真面目な話からふざけた話まで、一番色々な事を話せたのが鶴田さんです。話題に制限なんてひとつもなかったね。

一緒に神保さんのお宅にお邪魔したこともあったよね。その時は昼間からウオッカで乾杯したよね。ロシア料理レストランでワインをひとり一本空けたよね。若いころはお互いのんべえだったしね(笑)。

ふたりとも高級ホテルのアフタヌーンティーが好きだったよね。お互いの家にも何度か遊びに行ったよね。同い年だから、セーラムーンが好きなのも同じだったよね。ダイヤモンドのガラス細工を“幻の銀水晶”に見立てて喜んだりもしたよね(笑)。

鶴田さんはとても優しく、ちょっと心配り過ぎるところがあったけれど、それがお客さんへの細やかな気遣いや丁寧な手配に繋がっていたと思います。しっかりとお客さんのことを考えて、小さなことでも確認を怠らず、親切心が溢れた仕事をする鶴田さんに、私はいつも感心していました。鶴田さんのようにできるかは分かりませんが、今年は私もより行き届いた旅行手配ができるように心がけたいと思います。鶴田さんがいないオフィスは寂しいけれど、頑張ります。

鶴田さん。12 年間、お疲れ様でした。本当にありがとう！



日本は奥深い。 奥深さは楽しい。

モロソフ デニス (JIC 東京)

あけましておめでとうございます。去年はいい旅しましたか？

旅は人をいい方向に変えると、私は信じています。今まで見たことがない景色を見て、話したことのない人と話し、旅先の文化、食事、しきたりの違いに触れて、世界の多様性を知る。仕事柄、国内のアテンドに出かける事が多々ある私はメジャーな観光地だけでなく、普段なら縁のない地域にも足を運ぶ機会が増えてきました。生まれ育ったロシアに比べたらものすごく小さな島国の日本。しかし、国内旅行に出かける度に、大国ロシアに負けないどころか、むしろ勝ることが多いローカルな文化、習わし、言葉、食べ物に出会い、その度にこの国の多様性や面白さに驚かされます。

去年は一昨年続き、ハバロフスクのテレビ局 GUBERNIA の旅番組「ジャパン・バケーション」の撮影に同行しました。三重、奈良、和歌山、大阪、兵庫、そして茨城をおよそ 3 週間かけて取材しました。西日本と東日本。しかも、ゴールドenルートを外れている地域ばかり。日本の地方はこんなにも豊かで、こんなにも魅力的なところだと、改めて痛感した仕事でした。出会った絶



奈良・室生寺にて、住職さんと

観光客向けのパフォーマンスとしか言いようがない、たった 20 分の見学を「楽しむ」。それに対して、和歌山の勝浦港では遅めに起きて、ほとんど観客のいない会場で競りを好きなだけ見られます。京都の紅葉を「楽しむ」のには人ごみをひたすらかき分ける必要があるのに対して、奈良の室生寺では真っ赤に染まる境内をほぼ独り占め。都内の高級食店で予約を取るのは一苦労ですが、その高級店で使われている食材が育てられている茨城県では同じレベルのディナーを割安で食べられ、予約にも苦労しません。あくまでも私見ですが、三重や和歌山の人は気遣い上手で腰が低く、あたりが柔らかい。彼らのサービスを一度味わったら、一生忘れないでしょう。それに対して茨城県民は大声で話し、不機嫌そうな顔をする。その分、率直で、まじめで、裏表なく、付き合いやすい。

日本は奥深い。そしてその奥深さは楽しい。そういうとっておきの日本をこれからもたくさんのロシア人に紹介して、彼らの人生観、世界観をいい方向に変えていきたいと思っています。

ノリリスクからアルハンゲリスク

金井 義彦 (JIC 東京)

機内は「お休みの時間」で暗い。座席 33J を照らすライトの下、冬休み前の宿題である「これ」を書いている。お題が出てからどこかへ飛び、その旅の中で書くのが十数年恒例になっている。現在ロシア上空。ノリリスク付近を飛んでいる。

まだメンバーに入れてもらえているが、JIC スタッフの中でロシアとの関わりが最も薄い人間としての自覚は入社してからずっと持ち続けている。他スタッフはロシア留学経験があるロシア語のできる猛者ばかり。あるいはロシア人なのだから。少しずつでも追いつけるよう、毎週一回のロシア語講座に通い続け、検定を受けたりしている。入社当時に「ロシアと関わることになるなん

景はたくさんあり、西は竹田城跡の雲海、東は大洗磯前神社の日の出が特に印象に残りました。オーバーツーリズムと叫ばれている昨今、東京の築地でマグロの競りを見るには深夜 2 時からギューギュー詰め

て」と思っていた、ロシアから遠いどころか全く無関係な世界にいた自分。しかし実は、ほんのちょっとした縁が自分にもあったことに気付いて驚いた。

ある大阪の大学の研究室で仕事をしてお金をもらっていた頃。とても小さな研究室で、所属は数人の教員。そこへ研究員の一人としていたのがロシア人だった。名前はスーリン。更に他国の研究員がいたのと、日本人の割合も少ないのとで、研究室内の共用語は英語。その時は全くロシア語を話す必要がなかった。



撮影地: 香川

ロシア人名ダジャレを面白がっていた。

私が研究室を辞めて東京に戻り数年経った。その間一切連絡を取っていないのに突然スーリンからメールが届いた。「ロシアへ帰るから成田空港出発の前日、家に泊めてくれ」と。そしてスーリンはばたばたとやってきて一泊して飛び去った。私の民泊初めての外国人はロシア人だったのだ。

あれから十数年。2 か月前にこれまた突然、スーリンからメールが届いた。「学会で東京に数日滞在するから、、、」——相変わらずだ。

さて。「ロシアと私」の始まりはそんなほんのちょっとした縁だったのかなと思っていたけれども、中学生の時、友達のゲームボーイを借りる順番待ちをしていた、ブロックが降ってくる白黒画面のあのゲーム。『テトリス』はロシア人が作ったゲームではなかったか。そうかそうかそれが始まりか、、、否、違う。『第 21 回超人オリンピック』。マンガの世界で準優勝したウォーズマンはソ連代表の選手だったはず。

小学生から始まって今年も続いている。現在、アルハンゲリスク上空。

『ロシアと私』

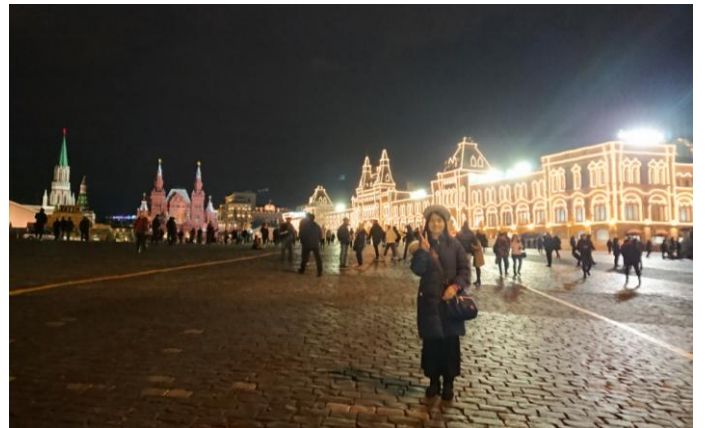
田邊 由紀子 (JIC 東京)

新年明けましておめでとうございます。“ロシアと私”と言うと、振り返れば人生の半分以上を共にしているのだな〜と、今更なが

ら感慨深くなりました。途中、少し離れてしまった時期もありましたが、大学進学の際にロシア語を学ぶという選択をした私は、間違っていなかったと思っています。

大学1年生の時に参加した初めてのロシア旅行の時、モスクワのシェレメチエボ空港は非常に暗くて、会うロシア人がみな怖い印象でしたが、公私それぞれの顔を持つロシア人と接して間もなく、その第一印象は覆されました。その後の 10 ヶ月間の留学を経て、JIC で働く現在に至るまでに、本当に沢山のロシア人との出会いがあり、ロシアに関する思い出は数えきれないほどになりました。それでも今もなお、他の国ではなくロシアに魅力を感じるのは、文化や芸術などと共に、個人的には裏表のない率直なロシア人の気質と、学生時代から付き合いしてきたロシア語に、ではないかと思っています。そうかと言って、私のロシア語能力はまだまだ未熟ではあるのですが...

昨年の秋、十数年ぶりに出張でロシアへ行かせて頂きました。夏期に運航が開始された S7 航空のイルクーツク線に乗り、一度は訪れてみたいと思っていた世界遺産のバイカル湖を自分の目で見る事が出来ました。湖の透明度に加え、高台から見た景色は、何と言葉で表現して良いか分からないほど神秘的で、ま



モスクワ・赤の広場にて

さに心が洗われるような絶景でした。そのあと、列車に揺られて向かったウラン・ウデの「眠れるライオン」でも、これぞシベリアという風景を目の当たりにして、ロシアの広大な自然に釘付けになりました。この 2 ヶ所は、いつか再訪したいと思っています。皆さんにお勧めしたい場所です。

そして、かつて私が留学したモスクワは大きく変わっていました。当時、ロシアは経済的に困難な時期にあって、授業の時に先生が仰っていた言葉をふと思い出しました。「あなた達は幸せよ。今のロシアとこれから変わるロシアを両方見られるのだから」と。まさにその通りだと思いました。昔ながらの市場やモスクワの街並みが見られなくなってしまった事は残念なのですが、それだけの変化を遂げたモスクワの陰にあるロシアの底力みたいなものを感じ、どちらも知ることが出来たことは貴重なことなのかもしれない。

何故こんなにロシアに惹かれてしまったのか、自分でもよく分かりませんが、ひとことで言えば、『飽きない国』だからかもしれ

ません。今年もまた、ロシアに惹かれ続ける 1 年にしたいと思います。

『額縁』

井上 沙弥香 (JIC 東京)

初対面の人にロシア留学をしたという話をすると、ほとんどの人が「どうしてロシアを？」と私に尋ねる。どうしてロシアなのか。結論からいうと私はお試しの渡航でロシアが放つノスタルジアに魅了されてしまったのだ。

クレムリン、エルミタージュ、夏の宮殿。どれもロシアを訪れるなら見てほしい場所には違いない。豪華、華やか、煌びやかな装飾、美しい建築デザイン。モスクワやペテルブルグまで行けば美術館や博物館もとにかく豊富(ペテルブルグにあるグストカメラや動物学博物館は日本ではまずお目にかかれない展示があるので何時間だって過ごしていただけるし何度見ても飽きない！)。しかし私は一番にどこが好きだろうと考える。思い浮かべたのは 10 年前、長距離の列車移動で疲れて、微睡みながらぼんやり眺めた車窓からの景色だった。車窓から見える風景が魅せるあのなんともいえない寂寥感が堪らなく好きだ。



車窓は額縁だ。コントラストの低いくすんだ色彩、堅く冷たいプラッツカルタのクッション、くたびれた毛布にサモワール。その全てが車窓からの景色をまるで映画のワンシーンのように美しく、そしてどこか物悲しくノスタルジックに映し出させる。

地平線に落ちる真っ赤な夕日、葦の茂る広大な深緑の野原、ひっそり佇む小さな民家の橙色の光。ときに速く、ときにゆっくり流れていく景色。眠気を抱えながら二段ベッドの上段に横になりそれを夢現にぼんやりと眺めた(普段は 1 分単位で時計を気にして、満員電車で駆け込み、電子機器に囲まれて過ごしているのに！)。普段自分が過ごしている近代的な都市の狭間にぽつかりと現れるロシアの自然はどこか異世界じみてうつつた。そのせいか、ときどき現れるぽつんと佇む寂しい家の中に、今はもう会えなくなった人が住んでいるような妄想さえ浮かんだ。

私はどうしてもそんなノスタルジックな気分になってしまうのだ

が、その気持ちがとても愛しいとも思う。良い映画をみた後のような心地よさを覚えるし、自分の中に強く残り続けている。だから繰り返し私はロシアに行きたくなるのだと思った。亡くなったあの人を探すような、日常を捨てるような。そんな気持ちを味わうために。他の人はどういう気持ちを抱えて鉄道に乗っているのだろうか。



デルジャビン 15 周年パーティ／写真、下左が荒川、右が山下

「ロシアな私」

荒川 好子 (JIC ペテルブルグ)

私がロシアを意識するようになったのは、1990 年のコンスタンチン君のニュースからです。みなさん、覚えていますか？

ひどい火傷を負ったコンスタンチン君がユジノサハリンスクから札幌医科大学の屋上にヘリコプターで搬送され、東西冷戦の終わりを象徴するようなニュースでした。その後コンスタンチン君は日本で治療を受け元気になって、サハリンに帰っていきました。それでロシア語学科がある大学を受験したのが、「ロシアな私」の始まりです。

まさかあの時、自分がこんなにどっぷりロシアにはまってしまうとは思ってもみませんでした。当時コンスタンチン君は 3 歳だったので、今年でもう 32 才でしょうか。わたしもおばさんになりましたが、コンスタンチン君もおじさんになったかなあ。

特別、ロシアのクラシックバレエが大好きとか、ドストエフスキーの小説を読んで人生が変わったとか、フィギアスケート皇帝ブリュンネンコの大ファンとかという訳ではないフツの私ですが、ペレストロイカ後あれよあれよと目まぐるしく変化する街並みや人々の生活に圧倒されポカーンとしながら、それでも自分にできることをがむしゃらにやっているうちに、いつの間にか、こんなに「ロシアな日本人」になりました。ちょっとやそっとじゃへこたれませんよ。

これからもたくましく頑張りますので、今年もどうぞよろしくお願いします！

Поздравляю Вас с Новым годом! Желаю Вам

счастья в новом году!!! Будем жить дружно, помогать друг другу и любить жизнь такую, какая она есть!

日本人の秘密

チステリーナ・イリーナ (JIC モスクワ)

学校のとき、日本の歴史についての番組をたくさん見て、日本は興味深い国だと思いました。日本語の勉強を始めたあと、日本とロシアは文化だけではなくて、考え方、話し方などもずいぶん違うことが分かりました。



まずは、日本人はとても責任感が強いと思います。日本人にとって常識や責任は当たり前ことです。外国人は無責任という訳ではありませんが、日本人は例えばヨーロッパ人より約束を守っているし、遅刻しませんから、自分の計画が立てやすいです。もちろん遅れる人もいますがそれは例外です。ロシアでは 15 分間の遅刻は全然問題になりません。

日本人はとても頑張る人だと思います。「頑張る」、「頑張って」、「頑張らしよう」、「頑張ります」という言葉がよく使われます。ロシア語でも同じ意味の言葉はもちろんありますが、そんなに頻繁に使わない気がします。日本人は努力する人です。仕事などにとても時間をかけると思います。多くの人は仕事を最優先する印象があります。ロシアにはそんなことはあまりないのです。

もう一つは直接言わないことです。場合によってはそれは良い時と良くない時があります。ロシア人と話すときストレートに言わないと相手には伝わらないことがあります。例えば、日本人が「すみません、明日ちょっと忙しいので・・・」と言ったら、最後まで言わなくても相手はその人は来ることができないとわかります。はっきり言わなくても察してくれることは日本の以心伝心の文化から来たと思います。

日本人は「いいえ」とはっきり言うことを避けます。ロシア人はそんなことは考えないから、ロシア人は直接過ぎるという印象

があるようです。例えば、日本人が「それは難しい」と言ったら、ロシア人は「難しい」は「不可能」ということではないので、他の別の方法があるだろうと思います。しかし、日本人の「難しい」は不可能と同義です。最初はすごく驚きましたが、今はなんとなくわかるようになりました。

以上のことは私の感覚です。他の外国人は意見が違ったりかもしれません。国によって、コミュニケーションの仕方が違うのはとても面白いです。また、他の国の言語を学ぶことは自分の認識も広げてくれると思いますので、それがとても楽しいですね。

最後になりましたが、皆様、あけましておめでとうございます。2019 年も楽しいことがたくさんありますように！新年もよろしくお祈りいたします。

「日本と私」

キリチェンコ オリガ (JIC 東京)



新年おめでとうございます。去年は色々とお世話になりました。今年も弊社と一緒に旅行していただくと幸いです。

私は、人生の非常に重要な部分である 30 歳まで、ロシアに住んでいました。その時は、次の人生の部分を日本で過ごすことになるとは想像さえできませんでした。私の出身地は地理的に日本のすぐ近くに位置するロシア極東なのに、青春時代に日本は私にとって非常に遠く、到達不可能で、珍しい惑星であるように見えました。しかし、大学に入って私は日本語を学び始めることになりました。



学習の過程で、日本語と文化、習慣、生活の規則等、日本自体がヨーロッパ人の立場から見ると大変難しくても珍しく非常に魅力的だと感じました。しかし、同じ理由で日本はヨーロッパ人にとって分かりにくい国です。でも、不可能ではありません。ロシアと日本は二つ全く異なる国であるにも関わらず、よく

考えるならば共通点も多いです。

私は日本が大好きで、全世界の中で最も住みやすい国の一つだと思います。日本人は、「本音と建前」にかかわらず全世界で一番親切で優しい人だと思います。もちろん、どんなに素晴ら

しい国でも様々な問題点、困難があります。仕事する時や日本での生活で起こる様々な問題点、困難を解決する時に、私の「ロシア人の本質」とロシア人的な解決アプローチはとても役に立ちます。二つの国に住む経験を持っていてそれを使うことができるのは幸運だと思いますが、それも単純ではありません。二つの国での生活経験を持っているということは、その両方の国の生活様式が私に影響を与えているということです。日本で生活経験と日本のシステム自体が私の本質に影響を与えるので、私は自分自身を 100%のロシア人と呼ぶことができません。しかし、その一方で、日本に 10 年間以上住んでいても、私はまだ日本人のようになったということは言えません。今の私はロシア人と日本人との何か中間の人であると思います。

ディープなロシアを体感しませんか？

山下 篤美(JIC ペテルブルグ)

サンクトペテルブルグより、「明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします」。

さて、こちらでの暮らしも 7 年目に入りました。私の住む地域は、個人経営の飲食店が建ち並ぶ通り。近年は、若い経営者の起業チャンスが増えているようで、新しい店が次々オープン。一方、その入れ替わりも激しく、夏休みに日本に帰省して戻ってみると「また店が変わっている」ということもしばしば起きています。

既に、東京にあってもおかしくないようなお洒落な店や、近年はベジタリアン

や、ビーガンに対応するメニューができる一方で、肉の専門店も。外食産業における食の多様化が一気に進んでいます。また、そのサービスは、高級店でなくても、十分に満足できるレベルに変貌。かつて言われたような「ロシアの店員は怖い」とか「全然笑わない」といったステレオタイプの表現は、少々現状に合わなくなってきたようです。

多様化ということで言えば、ソ連時代を懐かしむような、カフェのチェーン店も登場。価格が安いこともあって、旅行者や学生に人気です。



しかし、マヤコフスコボ通り20にある「кафе маяк マヤーク(灯台)」(写真)は、そういった外食産業の流れとは、大きく一線を画しています。この場所に店を構えて 25 年。写真のように、レーニン像が窓辺を飾り、薄暗い店内にはマルクス、レーニンの肖像画が掲げられています。座りづらく、重く硬い木の椅子、会計のおば様は、上記の典型的なロシア店員の面影そのままですし、給仕してくれるのは、おばあさんといっていいような年齢の方。店の隅には、ウオッカをひっかけられる立ち飲みコーナーもある、実にディープなお店。

注文した壺入りのボルシチは、ソーセージ入りで、にんにくがガツンと利いています。既に亡くなって 10 年以上経つバーブシカ E。そういえば、彼女が作ってくれたボルシチは「こんな味だったなあ」と、まあ、ひと昔前のロシアにタイムスリップできそうな空間なのです。

尚、お会計は、カード払い可。そこだけは、しっかりと今どきのビジネススタイルです。

ウラジオストクに導かれて…

佐藤 早苗 (JIC 東京)

あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

今年のお題は「ロシアと私(ロシアな私)」ということですが、私とロシアとの出会いは大学でロシア語を学び始めた時なので、遅い方ではないでしょうか。もちろんそれまでロシア語のアルファベットの読み方も知らず、目にしたロシア文字と言えば、「СССР」ぐらいだったような…。そう、その頃はまだソ連だったのです。

ソ連に対して当時抱いていたイメージは、寒くてどちらかといえば暗い国、ロシア人はめったに笑わない、クールな人々という感じでした。

そもそもなぜロシア語を学ぼうと思ったのか。それについては以前に書いたかもしれませんが、「ウラジオストク」との「運命的な出会い」から始まっています。大学受験を間近に控えた高校 3 年生の秋、志望する大学は決まっていたのですが、何を専攻するのかずっと決められずにいました。第一希望の大学は外国語大学だったので、何語を学ぶ？英語？ちょっとかじったフランス語？でもなんだかピンときません。そんな頃、世界史の授業を受けていた時にウラジオストクが登場したのです。

先生 「ウラジオストクの意味は…皆さん、知ってますか？ウラジーは支配せよ、ヴォストクは東方、つまり東方を支配せよ、という意味です。といっても日本でロシア語を知っている人は少ないから、皆さんわかりませんよね。」

それを聞いた瞬間、ピーン！！これだ！！ロシア語だ！！日本とロシアはこんなに近いのに、話せる人が少ない。というこ



とはこれから使う機会も増えるに違いない。その後、無事ロシア語を専攻することができ、今に至ります。

ロシアに旅行で行ったり、短期間ですが住んだこともあります。ロシアを嫌いになることはなく、逆にその魅力に惹きつけられる自分がいます。高校生の時に感じたあのインスピレーションは間違っていないと今でも自信を持って言えます。今尚 JIC でロシアと関わるお仕事ができるのはとても有難いことで、これからも細く長くロシアと接することができれば、と思っています。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

業務上の必要から・・・

小原 浩子 (JIC 大阪)

ロシアやその周辺の国々への旅行や留学をご案内する仕事を長く続けていますが、ロシアやソ連に興味を持つのは(今でこそ少し理解がすすんでいるようにも思われますが)、政治的な意図を持っているかマニャックであると思われる時期が長かったように思います。かつては東西冷戦の冷たい「敵役」であった、そんなロシアに興味を持つなんて変わっていると言われれば、まあそれも不思議ではないのかなと。今でも子供の学校のママ友に、私がロシアと関係ある仕事をしていると伝えるのは勇気がいることです。たとえ仕事であっても、それを伝えるだけで「ちょっと変わった人」のレッテルを貼られるのは明らかで、平凡な日常に対するちょっとしたリスクになるからです。

ロシアという国は、ロシア革命からソビエト共和国連邦の成立、その後の共産党一党支配とペレストロイカによる共産主義国家崩壊とかなり特殊な歴史をたどって現在に至るのですが、今となってはその特殊な部分は良くも悪くも目立つことなくひっそりと奥深くに息づく程度で、表面的には他のヨーロッパ諸国とそれほど違いはありません。ただ長期で現地に出向く方のためには

そのひっそりと奥深くに息づく特殊な部分を予めご案内することが、私たちの大切な業務の一つです。

たとえば「ロシア人は笑わない」というよく知られた特徴がありますが、ロシア人は初対面の人に笑いかけることこそ失礼で、初対面の人に笑いかけるのは「おバカ」だという考え方を持っています。日本では私たちは初対面ではほぼ笑むし、お店の人も愛想笑をしてお客さんに対応しますが、ロシア人は初対面ではいたって真面目、お店の人も愛想笑のようなことはしません(最近は変わってきているようですが)。東西冷戦のイメージもあいまって日本人からは「ロシア人は冷たい」と思われがちです。



金沢・東茶屋街にて(営業出張の合間に)

そのような見方に対して、ロシア人が変でも冷たいわけでもなく、その事象はロシアの歴史や文化の中から生まれた特徴の一つであり、仲良くなれば微笑むし、あいさつでも男女関係なく抱き合っただけ背中をたたくなど、冷たいよりむしろ熱いくらいであるというような話を長々としてしまうところが、マニャックだと言われるのかもしれない。

しかし私は業務上の必要からそれを行っているだけで、自分はいったって普通と思っています。JIC には私よりもずっとマニャックな同僚がたくさんいることですしね。

今年が皆様にとってよい年でありますように。

「ロシアとの出会い」

神保 泰興 (JIC 東京)

あけましておめでとうございます。私がロシアに興味を持ったのは、確か小学校 4～5 年生の頃だったと思います。当時は米ソ冷戦真只中。「ノストラダムスの大予言」という本がベストセラーになり、ある日突然核戦争が起こり世界が一瞬にして滅んでしまうことが、絵空事ではなく語られる時代でした。1979 年末のソ連軍のアフガニスタン侵攻、それに対するアメリカ・日本を含む西側諸国のモスクワオリンピックボイコット。国際問題に興味津津な



少年で、友達にいたらきつと面倒なタイプだったと思います。そんなある日、私たちにとってはいわば敵国のソ連はどんな国なんだろう

という興味がふとわきました。ソ連にも人が暮らしている、僕のように、核戦争の恐怖に夜な夜な震えている誰かがいるかも知れない、と。

そんなある夜、ラジオをいじっていると、偶然にも「モスクワ郊外の夕べ」のジングルから始まるモスクワ放送の日本向け番組を受信したのです。ソ連の宣伝一色の極めて偏った番組内容は、純真な小学生を親ソ一辺倒に洗脳するには十分過ぎました。モスクワ放送にその感動を伝えるエアメールを出すと、何か月かしてベリカード(受信確認証)がモスクワから届きました。それを受け取った時の興奮は今でも忘れることができません。その後中学生になり、ソ連・ロシアに関する本を片っ端から読み、ラジオのロシア語講座にも手を出しました(これは、キリル文字を覚えたくらいで長続きしませんでした)。しかし、中学 3 年生くらいになると、だんだんと自分の異質さが気になるようになり、表向きにはソ連狂いを隠すようになっていきました。

1989 年に進学した大学には「ロシア・ソビエト研究会」、なるサークルがありました。私は迷わず門を叩きました。ゴルバチョフ時代になり、ソ連・ロシアに関心を持っていることを隠さずにすむ世の中になりつつありました。やたらと濃い先輩方に、昼も夜もなく授業に出る暇もないほど、みっちりとしごかれる(ご高説をひたすら聞かされる)毎日が続く中、先輩から、ある日口親善団体が夏に船でウラジオストク(当時は閉鎖都市)に行く青少年交流団を組むけど行ってみないか、と薦められました。言うまでもなく、それが私と現在の職場である JIC との出会いになりました。1989 年夏、ナホトカ・ウラジオストク・ハバロフスク・ビロビジャンへの訪問が、自分にとっての初海外渡航でもありました。

それから 3 年後の 1992 年、大学 4 年次にモスクワへ 1 年間の語学留学へ。留学中、紹介をいただき、短期間でしたがモスクワ放送で放送原稿の翻訳のアルバイトをする機会にも恵まれました。自分がロシアと縁するきっかけになったモスクワ放送の職員証を受け取った時、何とも言えない感動を覚えました。

それからもう 27 年、ロシアとの最初の出会ってから数えると、すでに 40 年近くが経とうとしています。僕の残りの人生が 40 年あるかどうかわかりませんが、これからの日々もロシアとの形を変えた出会いや驚きに彩られていくことと思います。今年もこんな私とお付き合いいただければ幸いです。

「外国語」

柳沢 昭子 (JIC 東京)

明けましておめでとうございます。昨年 12 月、創価大学のロシア語スピーチコンテストに行かせていただきました。もちろん弁士としてではなくお客様として、です。参加者のみなさんのロシア語のスピーチは本当に素晴らしかったです。発音や作文など細かいことは分かりませんが、日本語で原稿を作り、ロシア語に翻訳して、発音などを調べて正し、さらにそれを暗記、しかも当日は大勢の前で発表する・・・当日までのみなさんのご苦労、努力を思うと、当日、あの舞台に立てたことがもうすでに素晴らしい！と本当に思います。スピーチコンテストにお邪魔していつも思うのですが、みなさんのロシア語を聞いていると、自分がロシア語を話しているような錯覚に襲われます。そして、コンテストが終了する頃には、自分もロシア語をすらすらと話せるかも！と



いう不思議な自信が湧いてきます。当たり前ですが、翌日には、あれは自分のロシア語ではなかったことを痛感して、またロシア語の学習に挑戦しよう、しなくては、と思わされます。職場では、ロシアの取引先の方と英語でやり取りをすることが多いのですが、こちらが急いでいる件や誤解を

与えたくないときには、ロシア語でやり取りをすることがあります。すると、とても迅速にお返事をいただくことができたりします(笑)。文法の間違いや語尾変化の間違いがいっぱいの私の文章でも、パートナーのみなさんは大事なところは理解してくれ、的確な返事をくれます。ありがたいなあと思ひますし、外国語をつかってコミュニケーションすることの楽しさと面白さを再認識します。

少し前ですが、なぜ日本人は英語を話せないのか、について調べた番組をテレビで観ました。テレビでやっていたのはたくさんある説の一つにすぎないと思うのですが、その番組では「日本人は英語の全ての単語を翻訳してきたから」という説を挙げていました。私はこの説にとっても納得してしまいました。勤勉な日本人は特殊な専門用語さえも日本語に翻訳することに挑戦して、英語の書籍は簡単なものも難解な専門書も日本では日本語に翻訳されている、と。国によっては、英語のすべてを母国語に翻訳してはいないそうです。英語をそのまま英語として受け入れて、英語で理解をしていく。母国語に翻訳することにこだわらず、母

国語と英語が自然といつもそばにあって、英語を「ザ・外国語」と意識するわけでもなくて、普通に英語も使ってしまうという状況があるそうです。だから日本人の自分は外国語を話せなくても仕方ないとあきらめているわけではなくて、だからこそ、もう少し気軽に外国語と付き合ってもいいのかな、正確に完璧に使いこなすことにこだわらなくてもいいのかな、と思いました(外国語のプロの方はそういうわけにもいかないかと思うので、あくまでも私の状況では、ということ)。今年はロシア語も英語も勉強し直して、ロシアやさまざまな国と楽しく関わっていけたらと思います。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

知ってることと知らないことの間

岡本 健裕 (JIC 東京)

この話の前半は、きっと似たような経験をした方がたくさんいると信じて書くのです。

1980 年代なかばに近畿圏にお住まいだったみなさんは、覚えているでしょう。夕方にテレビアニメ『はいからさんが通る』が再放送されていたことを。朝日放送制作の番組なのに、なぜか読売テレビがヘビーローテーションしていたことを。他の地方でも、この番組が何度も再放送されていたようですね。もう 30 年あまり前のことです。

知らないって！それは結構。何しろあれは大変よくない番組でした。例えば歌舞伎役者の美少年が登場するのですが、彼は大概女装しているのです。そして、ここが特にけしからん所なのですが、9 割方がひらひらフリルのメイド服で....、ごほん。そんなことよりも、このテレビアニメには、私の情操教育上、はるかにまづい問題がありました。それは、完結させなかったことです。とにかく一番いいところで打ち切られてしまうのです。おかげで私はロシア、とりわけシベリアに一種の過剰な憧れを抱きながら悶々とするはめになりました。

『はいからさんが通る』が、少女漫画史上屈指の名作であることに異論はないでしょう。舞台はちょうど 100 年前、大正ロマンを謳歌する主人公の女学生が、ある日突然、許嫁の陸軍少尉と出会い、ときに反発し、また惹かれあい、離別を経つつも、最後はちゃんと結ばれるという、ラブコメの王道のようなストーリーなのですが、この真の大団円を私が知ったのは、ずっと後、主人公カップルと同じくらいの青年になってからでした。

テレビアニメ版では、カップルは引き裂かれてしまうのです。少尉はシベリア出兵で前線に送られ、戦死。婚約者の死を信じられない主人公は、日本人脱走兵の噂を聞いてもしやと満州まで探しに行くものの、人違い。そこへ突然、ロシアから侯爵夫妻が革命を逃れて亡命してきます。その侯爵というのが、戦死したはずの少尉にそっくりで....。ここでアニメはぷつぷつ終わります。そのあとは大体、パタリロなどが放送され、また何事もなかった

ように『はいからさん〜』が第 1 話から始まるのです。

どうです、幼い児童にこれを繰り返し視聴させるのは酷なことでしょう？(パタリロの方も、よい子が見るには問題だらけな気がします、この際スルーしてください。)

当時の私は子供すぎて、少尉なんか大嫌い、と言っていた主人公がいつの間に恋に落ちたのか、何度見てもさっぱりわからない程の朴念仁でしたが、なんだかロマンチックなことが起きていくくらいは気づいていました。そして奇妙にも、この行き場のない情熱の答えはロシアにある、シベリアが教えてくれる、という錯覚を心に刷り込んでしまったらしいのです。これが人生の狂い始めてした。同じような経験をした方、いますよね？



さて私も成長し、大学生になったある年のこと。卒業式シーズンに、袴にブーツ姿の女子学生を大勢見かけた私は、仲間内でくだらぬ持論を展開して皆を呆れさせていました。「紐のないブーツなど普段着に用いるもので、断じて晴れ着にはふさわしくない、袴には絶対に編み上げブーツであるべき

だ」と。もちろん誰も相手にするはずがありません。

ところが、1 人だけこれに賛同する女子がいました。「もし『はいからさんが通る』を知る者ならば、この美意識を解するはず」と畳み掛けたところ、意気投合してしまったのです。変人はどこにでもいるものです。

一旦握手を交わした我々でしたが、ほどなくして、私にテレビアニメ版以上の知識がないことが発覚すると、彼女は幾分落胆した様子でした。そして翌日、原作漫画の愛蔵版を全巻まとめて、押し付けるように私に貸し与えてきたのです。

それからもう、あまりの面白さにむさぼるように読みました。キレッキレのギャグに笑い転げ、すれ違う愛情の切なさに涙し、ページを繰る手が止まらず最後まで一晩で読み切って、初めて知ったハッピーエンドに深い満足を得ました。そして気づきました。この漫画、ロシアのことはちょっとしか出てこなかったのね....。

このときの私はもう、ロシア留学から帰国した後(留学を決意するエピソードは 2014 年 1 月 10 日号を参照)でしたから、生殺し状態で放り出されるアニメ版の筋書きにずいぶん長いこと惑わされていたわけです。

でもそれでよかった。結局ロシアに答えなんかなかったからです。かの地はあまりに規格外で、何もわかりませんでした。そこに惹かれる、なんて言う倒錯気味かもしれませんが、知りたいことは知ってしまったら後戻りできないんです。ロマンチックって、そういうことでしょう。

2017 年、2018 年にかけて『はいからさんが通る』は前後編 2 本立てアニメ映画になりました。とうとう最後まで映像化されたの

です。嬉しくてすぐ見に行きました。映画でもやっぱりロシアの出番は少ないんですけど、一瞬だけ出てくるイルクーツクの街は、もう自分にとってよく知ってる場所になっていました。そう思ったらなぜか、胸にこみ上げてきました。涙がボロボロ出るのです。私どうしてこうなっちゃったかな。ぜんぜん後悔はしてませんけど。

ハワイと私

竹村 貢(JIC 東京)

あけましておめでとうございます。今年もよろしく願いいたします。

去年に引き続きロシアの話でなくてすみませんが、昨年 7 月にハワイへ行ってきました。

21:20 成田発のホノルル行大韓航空。飛行機が滑走路を走り普通であれば飛んでくれるはずなのだが、なぜか離陸しない。もう一回挑戦するが、また飛ばずに停まってしまった。そのまま機内でずっと待たされ、23:00 をすぎた頃に機内アナウンスが流れ、「機材トラブルのため今日は飛びません。明日 13:00 の変更になります。」とのこと。何もアナウンスのなかった機内で、舌打ちや驚きの声、怒りの声が広がった。成田空港は 23 時までしか離着陸出来ない夜間飛行制限のある空港のようだ。

飛行機から降り、パスポートチェックで出国中止のスタンプを押してもらい、スーツケースを受けとって到着ロビーに出ると、すでに大韓航空のカウンターには長蛇の列。大声で空港職員に文句を言っている人もいたが飛ばないものは飛ばない。その代り、相応の宿泊代と空港からホテルへの移動費・食事代は出し



てくれるようだ。しかし、渡航先の送迎やホテル、ツアーを頼んでも、それには一切保証してくれない。

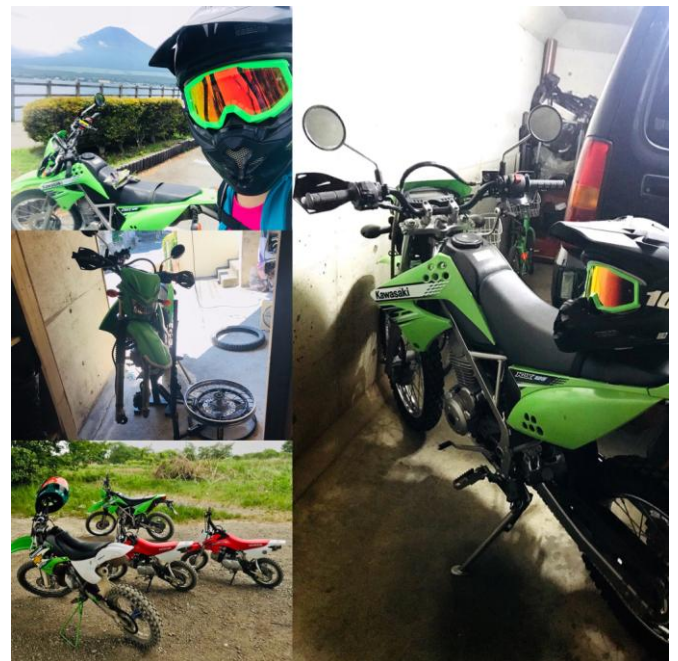
この日は成田周辺のホテルに空室が少なく、アナウンスでは、「帰れる人はご自身で家に帰って、明日また来てください」「帰れない人はホテルを用意するので並んでいてください」とのことだった。少しすると、係の人が近づいて来て、子連れは優先的に案内してくれるとのことで、ホテルの予約を取ってもらった。車で

ホテルに向かったがホテルに着いたのはもう 3 時過ぎだった。

ホテルで一休みして、また空港へ向かって、チェックインをします。すぐそばで、今回の遅延で発生した費用の支払いをしていた。食事代や移動にかかった費用の領収書と引き換えに返金してくれた。

13:00 発、今度は無事に飛び立った。普通に飛行機が飛んでいれば、前日の朝に着く予定だったが、ホノルルに到着したのは夜中の 1:00。タクシーを拾ってホテルに着いたのが 3:00 頃で、この日は朝 8:30 からオプションツアーを申し込んでいた。寝てしまうと起きられそうにないので、寝ずにツアーに参加する。子供たちはツアー中は夢の中で、子供を抱きかかえながらの観光で非常に疲れた 1 日だった。

旅行社の社員としては、旅行中に思わぬアクシデントに巻き込まれたお客さんの気持ちを推し量る初めての体験であったが、妻はもう大韓航空には乗らないと言っていた。



KLX125 と家族のバイク

二輪免許取得とアキレス腱断裂

白井 真理奈 (JIC 東京)

新年あけましておめでとうございます。

まずは昨年こちらに書いた目標達成のご報告を。お陰さまで、昨年 2 月に無事普通二輪免許を取得し、憧れのオフロードバイク KLX125 を購入しました◎ 我が家の 5 歳の双子にも CRF50(50cc のバイク)を買い、それに伴いパパもバイクを買い・・・ なんと、家族揃ってオフロードバイクデビュー!!!

子供達はキッズモトクロスの養成をしているバイクスクールに通い始め、全日本モトクロスの現役ライダーに手厚い指導を受け、ライディングスキルを磨くべく、日々オフロード走行練習に勤しんでおります。

一方私は、「バイクに乗る」という楽しみを分かってしまった今、夜な夜な近所へナイトツーリングに出かけたり、山中湖や箱根までソロツーリングへ行ったりしています。また、タイヤ交換やパンク修理もできるようになる為に、バイク用工具一式買い揃え、バイクをリフトアップして自分でタイヤ交換もしてみました。ずっと乗りたかった KLX125♥ バイク初心者ながらも十分すぎるほどの楽しさを味わい、魅力を感じています。

また、一昨年から始めたインスタグラムでは、バイク繋がりのお友達も沢山でき、9 月末にはバイク女子集まってるランチ会をやりました。残念ながら当日はあいにくのお天気でバイク女子ツーリングは出来ませんでしたが、「今度は絶対ツーリングに行こうね!!」と約束。

と、そんな矢先、自分の不注意からまさかのアキレス腱断裂!!! 普段、車の運転でクラッチ切るのは左足。それに、バイクの運転でシフトチェンジするのも、バイクを支えるのも左足。運転するのに左足を負傷するなんて、とても致命的でした・・・。

受傷 3 日後に入院決定。アキレス腱縫合手術をし、慣れない松葉杖生活が始まりました。ギプス固定期間が1ヵ月。更に、両足で歩く為に装具を付けての生活が1ヵ月。そして、手術から 2 ヶ月経ち、ずっと使って無かった左足に体重を乗せての本格的なリハビリが始まりました。

歩いたり、走ったり、階段を駆け降りたりと、普段の生活で何気なくやっていた事。それが突然できなくなり、怪我した自分の不甲斐無さを痛感する毎日です。いつもの電車に乗り遅れそうでも階段を早く降りられず、信号が変わりそうでも走れないのです。もちろんバイクにも乗れません(泣)

当面は無理せずリハビリに専念し、春にはバイクに復帰するのが直近の目標です。また、昨年お友達になったバイク女子達とのツーリングも叶えたいですね。そして、11 月に行われるモトクロスレースには今年こそ参戦できるよう、練習を頑張りたいと思います。

と言うわけで・・・ 来年のインフォメーションも乞うご期待(笑)

「親ばかな私」

白井 秀治 (JIC 東京)

あけましておめでとうございます。

毎年恒例 JIC タップ挨拶。今回のお題は「ロシアと私」が発せられました。ところが私の脳には非常に高性能なディレイト機能がございまして...、「ロシアと私」というものが既に記憶から抹消されており復元不能でございます。と言う訳で、今年もシリーズ化している「親ばかな私」という題目に独断で変更させて頂きたいと思います。

我が家の双子様も今年は 6 歳。行動・思考力も養われてきて、つい数年前までとはまるで別人です(バブバブ言っていた頃は

本当に可愛かったなあ)。

ところで男の子という生き物は「強い」「速い」「カッコ良い」が世界形成三大要素だと疑わないようで、対極の「弱い」「遅い」「ダサい」という概念を何故か『悪』と考えているようです。

強くても「遅い」、速くても「ダサい」、カッコ良くても「弱い」というカテゴリーは納得できず、強くても速くても「ダサい」、速くてもカッコ良くても「弱い」、強くてもカッコ良くても「遅い」は彼らを非常に混乱させるようです。この件に関し我が家の男子が具体的にそれぞれ思いつくもの:

『強い』=アパッチ攻撃ヘリ、そうりゅう型潜水艦、F2、F15、F35 戦闘機、ガンダム、モトクロスバイク (HONDA CRF50)。

『速い』=F2、F15、F35 戦闘機、ラリーカー (SUZUKI スイフトと MITSUBISHI ランエボ)、モトクロスバイク (前述)。

注) 通常の男の子はここで新幹線が出てくると思いますが、我が家のお二人様曰く、新幹線はドリフトしないから「速い」という対象から外れるそうです。



CRF50 に乗る我が家の双子

ものがモトクロスバイク=HONDA CRF50 のようです。

我が家の双子様。2018 年はモトクロスバイクスクールに通い始め、フラットダートを時速 30 キロで疾走。そんな自分達がこの世界最高だと確信しております。

そして、今年はレースに出たいとのこと。偉いぞ!! 男子はやはり強く、速く、かっちょ良くなくては!! 楽しみで仕方ありません!! そうなんです。ナルシズムは成長過程でとっても大事なんです。

あ! そう言えば...わたくしのロシア留学時、イタリア発シベリア縦断ウラジオストクまでユーラシア大陸をモトクロスバイクで走破した日本人初の元気なモトクロス男子が隣人でした!

こんなところでようやくロシアと繋がることができました! 良かった。お題クリア!!!

と言う訳で、今年もよろしくお願いいたします。

『カッコ良い』=ブルーインパルス、ガンダム、ラリーカー (前述)、モトクロスバイク (前述)。

上記全ての条件を満たしているものが『転んでも壊れず (=強い)、ライダー (自分達) は立ち上がり (=カッコ良い)、疾走する (=速い) モトクロスバイク』で、彼らの考える世界形成最上級に君臨する

10 月 19 日から 25 日まで、「ロシア映画祭 in 東京」が開催された。2017 年につづき 2 回目となる今回は、渋谷のユーロライブ、麹町のいきいきプラザ一番町、在日ロシア大使館を会場に、ハムダモフ・ルスラム監督の「底のないバッグ」をはじめ 8 作品が上映され、参加者の好評を博した。また、映画祭最終日に発生した日本語字幕をめぐるトラブルを補うために、12 月 15 日に早稲田大学で「天才バレエダンサーの皮肉な運命」の再上映会が開催された。

以下は、第 2 回ロシア映画祭の報告。ロシア側提供の日本語字幕を『全面改訂』するために急遽お世話になったロシア語教師の守屋愛さんにもその顛末記と映画祭をめぐる感想を書いていただいた。(編集部)

第 2 回ロシア映画祭 in 東京 上映作品

「底のないバッグ」(Мешок без дна)／監督ハムダモフ・ルスラム／2017 年作品／104 分／ジャンル＝ドラマ

「不思議な少女ドミニカ」(Доминика)／監督アゲイチェフ・オレグ／2018 年作品／80 分／ジャンル＝コメディ、ファンタジー

「ピオニールの名の下に！ 少年たちの最後の夏」(Частное пионерское 3. Привет, взрослая жизнь!)／監督カルピロフスキー・アレクサンダー／2017 年作品／98 分／ジャンル＝コメディ、冒険、ファミリー

「短波放送」(Короткие волны)／監督ドブジェンコ・ミハイル／2017 年作品／80 分／ジャンル＝ドラマ、コメディ

「田舎の純情物語」(Жили-были)／監督パーリ・エドアルド／2017 年作品／85 分／ジャンル＝コメディ

「302 ビス」(302БИС)／監督ミシュキン・アンドレイ／2017 年作品／17 分／短編映画

「グッピー」(Гупёшка)／監督フルマン・ブラッド／2017 年作品／79 分／ジャンル＝ドラマ

「天才バレエダンサーの皮肉な運命」(После Тебя)／監督マティソン・アンナ／2016 年作品／79 分／ジャンル＝ドラマ

第2回 ロシア映画祭 in 東京 監督らとのトークで盛上る

「ロシア映画祭 in 東京」の特徴は、往年のソビエト映画や過去の名画ではなく、ここ 1～2 年のうちに製作された最新のロシア映画が無料で上映されることだ。しかも、映画祭に合わせて上映作品の監督や俳優などが来日し、上映後に会場で観客とのトークを繰り広げるのがユニークで興味深い趣向となっている。今回も、「底のないバッグ」のハムダモフ監督、「不思議な少女ドミニカ」のアゲイチェフ監督、「グッピー」のフルマン監督、「302 ビス」の俳優アルザマソヴァ・リーザさんらが来日し、観客の質問に答えて作品の特徴や狙いなどを語り合った。

10 月 19 日の映画祭初日の開会セレモニーでは、堀潤さん(NHK 元キャスター)の司会で、本映画祭のロシア側主催者であるセルゲイ・ノボジロフ氏(God Kino 社)が挨拶に立ち、来日したロシア代表団の顔触れと上映作品を紹介した。

会場は連日 150 名前後の観客で埋まり、とくにロシア大使館(10 月 23 日)では 250 名の観客でホールが満席の盛況となった。

上映後のアンケートでは、多くの感想が寄せられた。「ロシア映画は観たことがありませんでした。とても良かったです。」

「大学でロシア語を学び始め、わかる表現が聞き取れることの面白さを楽しめました。」

『田舎の純情』を見て、ロシア映画の最良の雰囲気を感じた。それは人の優しさや楽天的な人生観だと思います。」

『ピオニールの名の下に』面白かったです！ロシア映画でこんなに笑えるとは思わなかったです。」

『バレエダンサー』を見て、ロシア文化のパワーを見た気がしました。クラシック音楽、本物の文化…」



開会セレモニー、10 月 19 日 ユーロライブにて

第 1 回映画祭の「超ドタバタ開催」(弊紙 193 号既報)の教訓を踏まえ、今回は 4 月から会場探しを始めたのだが、上映作品の全リストがモスクワから届いたのはやはり開催 1 ヶ月前。準備不足は否めないが、前回よりは工夫を凝らして開催日を迎えることにした。具体的には、ロシア側が日本国内での集客・宣伝費用をほとんど負担しないという予算制約の下で、少しでも宣伝効果を上げかつ費用負担を軽減する方策として、日本側でパンフレットを制作し会場で販売すること、それとあわせてより多くの協力者・団体を発掘すること、開会セレモニーや毎日の上映後の演出を凝らして印象深い映画祭として定着させることなどであった。

開会式は、ロシア側が張り切り過ぎて非常に長いセレモニーになってしまったが、毎日の上映後のトークは概ね好評で、アンケートでも「観客との双方向のやり取りが貴重」、「俳優へのインタビューなど、交流できたことが本当によかった」といった意見が

寄せられた。

パンフレットには日本ロシア協会最高顧問の鳩山由紀夫氏(元総理)がメッセージを寄せてくださり、2018 年「日本におけるロシア年」のイベントとしても本映画祭は成功を収めた。

今回も一般社団法人ユーラシア映画祭(増山麗奈代表)と JIC 国際親善交流センターで実行委員会を立ち上げ、増山さんの発案で前回上映作品のいくつかを DVD 化して販売することが急遽決まった。著作権上の問題をクリアして DVD にできたのは「抒情」(ニコライ・ブルラク監督)の一作品のみだったが、映画祭をきっかけに始まった日ロ映画交流の取り組みは着実に拡大している。

また、12 月の再上映会では、映画評論家の杉浦かおりさん(早稲田大学ロシア語講師)と最近 2 本目の日ロ合作映画「ソローキンの見た桜」を撮り終えたばかりの映画監督・井上雅貴さんに対談をお願いし、ロシア映画の魅力を語り合ってもらった。パンフレット制作や再上映会の開催にあたり、ロシア文学会、発する FM、毎日新聞社、早稲田大学文学部、専修大学などの協力をいただいたことも、今後につながる大きな成果となった。

しかし、その一方で課題もたくさん残されている。

まず、観客集めの主要な手段は今や Twitter や Facebook などの SNS 発信が中心になっているとはいえ、ロシア映画祭の認知度を高め定着させていくためには、日ロ協会や日ロ交流協会、ロシア文学会といった日ロ関係団体、さらに日本の映画関係者から幅広い協力をいただく必要がある。そのためにはせめて 2 カ月以上の準備期間が必要で、ロシア側主催者にさらに早い情報提供を求めて行かなければならない。

アンケートでも「字幕がとてもおそまつ」、「映画の良さが伝わらないのは勿体ない」という指摘が多くあった。良質なロシア映画を日本の観客に楽しんでもらうためには質の高い日本語字幕が不可欠だ。これまでは予算上の制約からロシア側が字幕を制作していたのだが、その質を高めるために日本側からも協力体制をとる必要がある(守屋愛さんのレポートにあるとおり、今回も「突貫工事」で『ドミニカ』の字幕の全面改訂をせざるをえなかったのだが)。

映画祭の運営についても「手作り感あふれる温かい上映会」とは言っていたものの、裏返せば「バタバタされましたね。」ということになる。アンケートでは、「予定終了時間を大幅に超えたので帰りが大変でした」、「上映前の挨拶が長すぎる」、「すべての段取りを今一度検討した方がいい」といった手厳しいコメントをいただいた。

2019 年のロシア映画祭の開催はまだ決まっていないが、もし第 3 回目をやることになるのであれば、今回よりもっとスマートに、もっと多くの人に、ロシア映画を本当に楽しんでもらえるように取り組みたいと思う。

(ロシア映画祭実行委員会; 伏田昌義)



10 月 23 日、ロシア大使館にて

ロシア映画祭 こぼれ話

『不思議な少女ドミニカ』字幕制作

守屋 愛 (慶應義塾大学 非常勤講師)

昨年に引き続き、10 月に東京でロシア映画祭が開催された。これはロシア文化省の発意に基づき、シベリアの地方都市ブラゴヴェシチェンスクで行われている『アムールの秋』映画演劇祭の主催者たちが委託を受けてコーディネートし、さらに一般社団法人ユーラシア国際映画祭と JIC 国際親善交流センターが協力して日本側で開催している。この映画祭に縁あって関わることができたので、今回上映された 8 本の映画の中から 2 本の映画のこぼれ話をここに書かせてもらう。

『不思議な少女ドミニカ』とオレグ・アゲイチェフ監督

『不思議な少女ドミニカ』(Доминика) あらすじ: 独身貴族のコンスタンチンは若くて才能あふれる建築家だが、あるときプロジェクトのクライアントから作品にハートがないと指摘され、すべての歯車が狂いだす。そんなとき、彼の元に不思議な女の赤ちゃんが現れる。あっという間に大きくなっていく彼女ドミニカを成長させるものは...

《アムールの秋 映画演劇祭 2017》最優秀脚本賞受賞(脚本: オレグ・アゲイチェフ)

忘れもしない『ドミニカ』の字幕チェック大至急! 火曜までの依頼がきたのは、月曜日だった。たしか『ドミニカ』の上映は土曜日のはず。急な話だけれど、ロシア関係では直前のドタバタはよくあることだ。

ロシア映画祭を主催するユーラシア国際映画祭の田島瑠奈さんは、とてもエネルギーあふれる女性で、いろいろな面で厳しい状況にあるこの映画祭を力強く牽引している。田島さんからの依頼は、『ドミニカ』の日本語字幕に不備があり、田島さんがチェックするので、その後の字幕を再度チェックしてほしいというもの

だった。火曜は午前中に大学の授業があるけれど、午後ならばいいですよと返信したところ、字幕は明日の火曜日に送るので、まずは映画を視聴しておいてほしいと未修正の字幕入の映像を受けとった。

ロシアのテレビはインターネットで同時配信されている。日本にいてもロシアのテレビは簡単に観られる。ネットテレビっ子の私は、映画『ドミカ』のテレビコマーシャルだけは何度か目にしていた。これは、話題作が見られる！と思った。

月曜の夜に視聴。数分後…。こ、この日本語字幕は…まさかの自動翻訳？！

しばらく漫然と見ていたが、字幕を読んでいては映画の内容が頭に入ってこない。そこで、字幕は極力見ないようにして、映画を楽しむ。ネタバレになるといけないので内容は細かく言わないが、ユーモアとシリアスが入りまじった、心温まるいい映画だった。満足。

もう一度、今度は日本語字幕を見てみることにした。……これで映画を理解するのは無理でしょう。ロシア語を知らない田島さんがどんなに想像力を広げても、ここからプロットを導き出すのは無理でしょう。ロシア映画祭はこの映画だけではない。金曜日から始まって、一週間毎日一本上映。ロシア側からも映画監督・俳優・コーディネーターからなる代表団がやってくる。彼らの世話、会場の手配、会の進行。ただでさえ多忙を極めているときに、田島さんがこの字幕をチェックするなんて、気の毒としか言いようがない。それに、こんなにいい映画を作った監督も来日するのにな、こんな字幕をつけられたことを知ったら、日本の観客の反応を目の当たりにしたら、さぞやがっかりするに違いない。誰だ!? こんなことをしたのは!? という義憤まで覚えた(ロシア映画祭の字幕はロシア側が作成してくるのです。)

というわけで、翌日早々に田島さんに、私が先に修正作業をしようとして申し入れた。大学の授業から飛んで帰って、2 時に作業スタート。でも、どんなに超人的な力を発揮しても、10 時間で映画一本の字幕を完成することは無理なので、田島さんと時間確保の交渉。期限は最大でいつまで伸ばしてもらえるのか? 田島さんはロシア側と交渉。代表団はモスクワを出発するので、モスクワ時間の明朝 9 時までにはほしいとのこと。ということは、明日の午後 3 時まで。田島さんのチェックの時間も考慮すると、もうちょっと早めか。で、そこからは、家族に「私はここにいるけれど、いません!」と宣言して、その他一切を放棄して没入。

夜中の 2 時半に田島さんからのメッセージが入る: 進捗はどうですか? あ、田島さんも寝ていないんだな…。

そして、土曜日『ドミカ』上映の日。この映画で『アムールの秋』映画祭の最優秀脚本賞をとり、監督デビューを果たしたオレグ・アゲイチェフ監督を紹介してもらった。にこやかな好青年で、自動翻訳で字幕をつけたことを申し訳なさそうに白状してくれた。……あなたが犯人か!? でも、この気さくで人懐っこそうな若き映画監督は、その昔、デビュー作でいきなりベネツィア映画祭金

獅子賞をとったばかりのズビャーギンツェフ監督を彷彿とさせた。昔、そんなことがあった。指導教官が若きズビャーギンツェフ監督を大学に招いて、特別授業をしてもらった。未来の大物監督は授業後の懇親会でも学生たちに気さくにサインをしてくれた。アゲイチェフ監督もこれから大物になっていくのだろうか。彼はモスクワ物理工科大学出身で、コマーシャルの制作会社を経営している。で、そこで得た資金で、趣味のように芸術映画を作ったのが『ドミカ』であり、それがいきなり受賞を果たしたのだそうだ。そのせいか、なにしろ終始うれしそうで楽しそうだった。今後のアゲイチェフ監督の活躍に期待したい。

『グッピー』のブラッド・フルマン監督

『グッピー』(Гупі́шка)のあらすじ: タマラは夫に従順な主婦。あるとき、大人しそうな男性パーシャと知り合い、家に通して身の上話を聞いてもらう。パーシャにはタマラが夫に抑圧されているようにしか思えないが、彼女の話題は、彼女をつらい田舎の退屈な生活から救ってくれた夫への感謝ばかり。けれど、話の合間に彼女のささやかな願望も見え隠れ…。

監督は本名ヴラジスラフ・フルマノフの他に、外国人にも呼びやすいブラッド・フルマンという通称も使っている。好きな方で呼んで OK。ここでは馴染みやすいフルマン監督ということにしよう。今回の映画の主演女優ネーリャ・ポポワさんが奥さんだ。

今回、ネーリャさんの舞台スケジュールの都合で、フルマン監督夫妻だけ一足遅れで、映画祭終盤、自作の映画『グッピー』の上映にあわせて来日した。

フルマン監督はかなりのキャリアの持ち主。しかも、私の大好きなテレビドラマの作品も数多く手がけている。監督もサンクト・ペテルブルグの出身だが、同郷人の私の夫は「バンディット・ペテルブルグ」(Бандитский Петербург)の監督じゃないかあ!」と喜んでいて。ちなみに、フルマン監督の作品はシーズン 4(2003)、5(2003)、6(2003)。ハードボイルドは私の中で優先順位が低いので、私は見ていないが、どうやらピーチェル魂を心底揺さぶるらしい(ピーチェルはサンクト・ペテルブルグの愛称)。文学系が好きな私としては『クプリーナ』シリーズの中の『穴』(2014)と『秘めた情熱 «Таинственная страсть»』(2016)の監督という認識。知り合いになれるなんて嬉しい。余談だが、特に 1960 年代の文学に関心がある人は絶対に『秘めた情熱』は観ておいた方がいい。ワシリー・アクシヨノフによる同名作品で 1960 年代当時の文壇の様子が回想的に描かれている。日本でも人気の高いチュルパン・ハマトワの主演。

ロシア映画祭が終わって代表団のみなさんは帰国してしまった。それなのに、勇敢にもフルマン夫妻は二人だけでもうちちょっと日本に滞在することにした。通訳のドミトリーさんも帰ってしまったのに。それで、ちょっとロシア語を話せば誰でも良かったのだろうけれど、私が観光のお供について行くことになった。学会は毎年あるけど、フルマン夫妻は一生に一度かもしれないから。というわけで、鎌倉へ。

それまで代表団の若手達と、秋葉原やお台場の「新しい日本」を観光していたフルマン監督は「古き良き日本」に飢えていた。断っておくけれど、監督はお歳ではない。ここは比較の問題。「日本の魂に触れたい!」という熱いフルマン監督と、「古いものも新しいものもすべて見るべきよ」という冷静なネーリヤさん。二人はとても仲の良い夫婦だ。鶴ヶ岡八幡宮、竹林と石庭のある報国寺、鎌倉大仏、長谷寺とまわって、監督が喜んだことといったら。ロシアでは白樺が祖国のシンボルで、両手で木を抱き、額を樹幹につけて想いを寄せる代表的なポーズがあるが、監督はそれを竹でやりたくて仕方がない。竹林で周囲の人がいなくなる度に、「早く!撮って!」とポーズングをしている監督がねだる。傍から見れば、大の大人が、というより、いい歳をしたロシアの大男が、と思えそうなのだが、監督は実は意外なほど無邪気な人物なのである。

かと思えば、監督は舞台監督でもあり、映画監督でもあり、最大手のテレビ局チャンネル1とも契約しているドラマ監督でもある。チャンネル1との契約では大河ドラマ系の歴史ものをリクエストされているとのこと。今回の来日を通して、ショートフィルムの日露共同制作の話も持ち上がっているらしい。仕事人なのだ。

最後に、監督との連絡手段に WhatsApp が便利だと、勧められて私もダウンロードして使うことになった。監督が帰国してから、諸連絡で何度かやり取りをしているのだが、いつでも監督の反応が無茶苦茶早い。一瞬で既読マークがつく。もちろん返事も早い。お茶目だけどやり手のフルマン監督は、24 時間携帯を握っているのかもしれないと、私は勝手に想像している。(もりや・あい/慶應義塾大学・お茶の水女子大学・早稲田大学 非常勤講師)



デルジャービン・インスティテュート 15 年周年 最初の学生は JIC 留学生

荒川 好子(JIC ペテルブルグ)

サンクトペテルブルグの語学学校デルジャービン・インスティテュートが 15 年周年を迎え、12 月 16 日に「15 年目のお誕生日会」にお招きいただきました!おめでとうございます!

JIC は、ロシア語の短期研修で年間 100~150 名をロシア各地に送りだしていますが、中でもデルジャービン・インスティテュートは最大の受入機関の一つです。15 年前の開校当初からのお付き合いで、デルジャービンの記念すべき 1 人目の学生はなんと JIC 生でした!

あっという間に、あれから 15 年!最初は学生 1 人と校長先生含めスタッフ 3 人で始まったデルジャービンですが、お誕生日会には約 100 人のスタッフの皆さんがいらっしゃいました。現在は、外国人向けのロシア語講座だけでなくイタリア語講座も開講して、外国人だけでなくロシア人も学ぶ場になっているそうです。ロシア語の先生方も陽気で楽しい人たちですが、イタリア語の先生方はさすが明るさ倍増ですね。

デルジャービン・インスティテュートの魅力は、なんといってもアットホームな雰囲気!特に校長先生のアレクサンドルさんの人柄があつたかほんわかです。授業のほか、学校でスタッフや先生方も参加するエクスカッションやレクレーションを企画してくれるのもうれしいサービスです。そんなイベントに参加するスタッフや先生方が学生たちを楽しませるだけでなく、自分たちも一緒に楽しんでくれるので、さらに親近感がわきます。

15 周年の「お誕生日会」でも、みんなおしゃれをして集まり、ゲームに参加したりダンスをしたりおもしろい写真をとったりして、みんなで盛り上がりました!!!

日露合作映画・井上雅貴監督

ソローキンの見た桜



日露戦争時代、日本には多くのロシア兵捕虜収容所が存在した。松山市には全国で初めて収容所が設けられた。松山を舞台に運命的に出会ってしまった日本人看護師とロシア将校を中心に、歴史に翻弄された人々を描く感動のドラマ。

主演: 阿部純子、ロデオ・ガリュチェンコ

出演: 斎藤工、伊ッセー尾形、アレクサンドル・ドモガロフ、山本陽子(特別出演)、ほか

3 月 22 日、角川シネマ有楽町にてロードショー

Tel: 03-6268-0015 www.kadokawa-cinema.jp

本の紹介

右ハンドル

Правый руль

著者:ワシーリイ・アフチェンコ
訳:河尾 基 発行:群像社
定価:2000 円+税



極東の魅力を発掘する若き才能、作家、 ジャーナリスト ワシーリイ・アフチェンコ

榎本 真奈美 (同志社大学講師)

ウラジオストクで活躍する若手作家ワシーリイ・アフチェンコ (1980 年生まれ) は、現在「ウラジオストク」新聞の政治部担当ジャーナリストでもある。地質学者の両親を持ち、生まれはイルクーツク州の町チェレムホ、ソ連の劇作家ヴァムピーロフと同じ産院で生まれたことを誇りにしている。生後すぐにウラジオストクに移り育ち、極東大学ジャーナリスト学部を首席で卒業、今や極東を代表するロシアの言論人だ。

ロシア文学を語る時、ロシアでは「プーシキンこそ我々のすべてだ」という言い方がある。石油景気でロシアの経済が上向きになれば、「石油こそ我々のすべてだ」という文言が踊る。そしてアフチェンコは言う、「右ハンドルこそ我々のすべてだ」(『ウラジオストクの地球儀』2010 年)、と。

2009 年、処女作のドキュメンタリー小説『右ハンドル』を発表すると、「ナショナル・ベストセラー」賞をはじめ数々の文学賞にミネートされ、極東の枠を超えて新進気鋭の若手作家としてロシアで注目されることになった。『右ハンドル』は、極度に中央集権型のロシア社会で「置き去り」にされていたソ連崩壊後のロシア極東地域で、日本の中古車がいかにしてロシア人に受け入れられ地域経済に貢献してきたのかが、著者の青春時代の実体験をふんだんに盛り込みながらユーモラスに描かれている。

ウラジオストク市民の日本車をめぐる政府との攻防は、2008-2010 年頃にロシア政府が国産車の生産と販売を促進するために極東の日本車規制に乗り出した時、大規模な反政府デモが起こったことで顕著になった。「日本車支持!」「ウラジオストクを日本に渡せ!」と書かれた横断幕を掲げたウラジオストクの市民に対して、ロシアの特殊部隊「ゾーブル」が発動する程の事態になり、クレムリンとの距離を物理的にも精神的にも思い知らされることになった。

本書でも、極東住民にとって日本車は「生存手段」であり、クレ

ムリンが国民に対して本来すべきことを地元の「闇商人」がやっているだけだ、と政府の偽善的態度を著者は痛烈にする。「普通の市民が愛好する車を禁止するなら、ましてや国産車を売りたいのなら、まずプーチンはじめ政府高官が乗るメルセデス・ベンツや BMW を禁止しろよ」、ということだ。

日本車は一般的に「日本人女性」を意味するロシア語で「イボンカ」と呼ばれ、ウラジオストクでは「結婚するならロシア娘、運転するなら日本娘」という言い回しもあれば、地元出身の人気ミュージシャンが日本車を恋人に見立てた歌詞が流行るなど、私たち日本人の預かり知らぬところで極東社会に浸透している。

もともと車に対する興味はさほどなかったとアフチェンコは言う。人々の口からさかんに出る車にまつわるスラングの数々や、



ウラジオストクのゼリョンカ (中古自動車市場) に立つ著者

(写真撮影 オレグ・マリツェフ)

機知に富んだ言い回しに耳を傾けるうちに、その言葉使いの面白さに「ハマッた」らしい。ここは言語に敏感な文系青年たるところだろうか。そこにジャーナリストならではの社会批判的で冷静な視点が結び付き、ドキュメンタリー小説『右ハンドル』に結晶したと言える。交通違反をした時の警察官とのやりとりや、中古車市場「ゼリョンカ」の様子など、所々に散りばめられた実生活の一コマから、庶民の日常が垣間見えるのも面白い。2018 年、群像社より絶賛発売中!

アフチェンコは、ウラジオストクを中心に極東の現実を記録し、歴史を掘り起こすこと、地元の良さを再発見することが使命だと思っていると語ってくれた。それは、続く著作『ウラジオストクの地球儀』、『透明なフレームのクリスタル〜水と石をめぐる物語』(2016)、『ファージェーフ』(2017) で着実に表現されている。

ディープなウラジオストクが知りたい人は、『ウラジオストクの地球儀』を手にとろう。単なる「ウラジオストクの歩き方」的な、いわゆる観光名所やレストラン案内のガイドブックではない。アルファベット順に並ぶ単語は、地元住民の日常に馴染みのある場所、食べ物、人物などで、地元の人しか知り得ない、もしくは地元の人ですら知らない情報もふんだんに含まれている。例えば、「q(チェー)」の項目には「日本のブラックコーラ」とあり、「インターネット広告の密輸アルコール飲料を意味する婉曲的な言い方」とある。誰かが手荷物でこっそり持ち込んだとしか思えない、中古自動車市場の片隅で売られる日本のウィスキー類の写真も

載っている。また、「クマのプーさん」は 90 年代の組織犯罪グループの呼び名だったり、「真珠」は「たまにカラス貝の中で成長し、そのまま缶詰に入っている時がある」、だ。日本でちりめんじゃこの中に小さなタコの赤ちゃんが入っているようなものだろうか。ウラジオストクの人々の日常に浸透しているが、通りすがりの外国人には知る由もない情報ばかりで思わず笑ってしまうこともある。

その他、海に囲まれた豊かなウラジオストクの魚事情と石や鉱物をモチーフに沿海州を描いた二作目の小説『透明なフレームのクリスタル』は、故郷への愛情が詰まった作品だ。ソ連崩壊後の混乱期は父親と魚を釣って市場で売ったこともあり、例えば「イワシ」はアフチェンコの子供時代のシンボルらしい。ウラジオストクは日本と同様に海産物に恵まれているが、ロシアで食される魚の種類や食べ方の違いもさることながら、大漁に獲れる魚も未熟な冷凍技術でいったん中央に運ばれ、いつ冷凍されたのかも判らない仰々しい姿で戻ってくる事情なども面白い。

ちなみに、アフチェンコはレンガ集めが趣味だ。ロシア人男性の憩いの場「ガレージ」でコレクションを保管している。刻印された印からいつどこで製造されたレンガなのかを知る専用サイトもあるらしい。また、本書の前書きを有名作家ザハール・プリレーピンからプレゼントされ、大御所歴史作家のレオニード・ユゼフオヴィッチからも賛辞を受けとても嬉しかったそうだ。

最新作はモスクワの出版社「マラダヤ・グヴァルディヤ」の名高い『偉人伝シリーズ』から出版された、20 世紀初頭の内戦期に沿海地方で幼少期と青春時代を過ごし、ソ連時代は教科書にも載っていたというアレクサンドル・ファジェーエフの伝記作品だ。自殺という悲劇の最期を迎えた、今や「忘れられた」極東作家の人生と作品を掘り起こした意欲作である。

地元を愛する気持ちはまた、ウラジオストクの人口流出を憂う気持ちにも表れている。ウラジオストクは極東の都とはいっても、多くの才能ある若者が仕事やキャリアを求めてモスクワやペテルブルグに移住してしまうのが現状だ。そこで、作家はチェーホフの『サハリン島』の言葉を引用し「この土地から早く出ていかねばと思う偏見や思い込み」によるものだと言明を鳴らす。ウラジオストク出身の人気ロック歌手ラグチェンコが歌うように「出ていこう、出ていこう……」と闇雲に思いすぎではないか、と町出たいシンドロームに異論を唱えつつ、まともな仕事、給料があり市民が安心して暮らせる町を実現するために政治に厳しい目を向ける。こうしたところにも、極東の魅力を再発見しようとする作家、ジャーナリストとしての使命感、正義感がうかがえる。

冷静沈着で物怖じせず、誰にでもはっきりと自分の考えを言う厳しいイメージのあるアフチェンコだが、普段は優しい 2 児のパパでもあり、ガレージでテキパキとシャシュリクを準備してくれたかと思えば、ウラジーミル・ヴィソツキーが大好きで酔えば歌う。……気がつけば、ずらりと並んだウォッカの空きビンに肝を冷やしたことは言うまでもない。

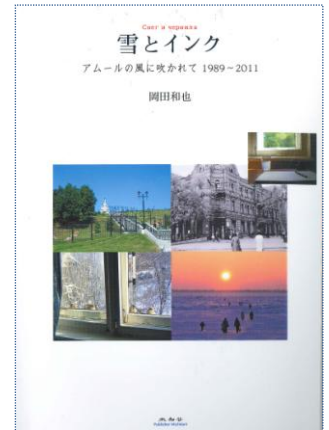
(かしもと・まなみ)

本の紹介

雪とインク

アムールの風に吹かれて
1989～2011

著者:岡田 和也
発行:未知谷
定価:2000 円＋税



著者は、1989 年 10 月末から 2011 年 3 月末まで、いわゆる「モスクワ放送」（ソ連テレビラジオ委員会／ロシア国営ラジオ放送・通称『ロシアの声』）ハバロフスク支局の翻訳員・アナウンサーとして、ロシア極東で 21 年間を過ごした。

本書は、著者が早稲田大学の露文科を出て、ソ連レコードの輸入元会社に就職し、その数年後 28 歳でハバロフスクに赴いて彼の地で暮らし、ソ連崩壊後のロシア社会の激動とともに過ごした現地生活のさまざまなエピソードを、回想風のエッセイにしてまとめたものである。

エッセイは、「渡露」「放送」でハバロフスクに渡る前後のいきさつから放送局での仕事を回想し、「衣」「食」「住」でロシア生活のエピソードを綴っている。中でも圧倒的に頁数が多く面白いのが「食」のエピソード。食べることは生活の基本であり、社会の変化にもかかわらず、昔も今もあまり変化しないものだからかもしれない。

放送原稿を毎日ロシア語から日本語への翻訳とともに仕上げ、さらにアナウンサーとして読み上げる仕事を何年も続けてきた人だけに、翻訳家として苦労した分、著者の言葉に対するこだわりが文章の随所に立ち現れる。漢字の造語とともにそれへの著者独特のロシア語混じりのルビが面白い。氷菓子（アイスクリーム）、火酒（ヴォートカ）、自家製火酒（サマゴーン）、前菜（ザクースカ）、露西亜風パイ（ピローグ）、発酵牛乳（ケフィール）、発酵クリーム（スメターナ）、檸檬発砲水（レモンスカッシュ）、西比利亜風餃子（ペリメーリ）、等々。

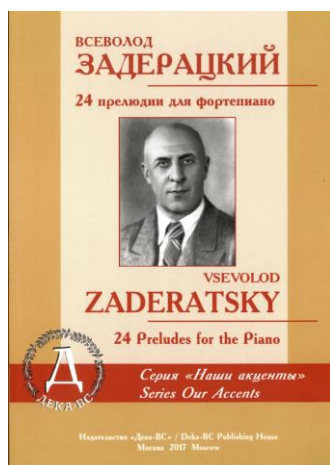
こうして編み上げた 95 編のエッセイは、どこから読んでも懐かしいとしか言いようのないロシアの匂いをそこはかとなく漂わせている。(F)

著者略歴:おかだ かずや

1961 年浦和市生まれ。1984 年早稲田大学露文科卒。1989 年～2011 年ロシア国営放送会社「ロシアの声」ハバロフスク支局員。2011 年帰国。2011 年～17 年新聞「ロシースカヤ・ガゼータ（ロシア新聞）翻訳員。

訳書：アルセーニエフ著／バヴーリシン画『森の人デルス・ウザラー』（群像社）、レペトウーヒン著／きたやまようこ絵『ヘフツィール物語』（未知谷）など多数。

前奏曲とフーガ ～バッハから20世紀へ～



バッハ(1685-1750)の書いた 2 巻・48 曲からなる『平均律クラヴィーア曲集』は、クラシック音楽の旧約聖書と呼ばれる古典中の古典です。この曲集がとる「前奏曲とフーガ」の形式は、20 世紀に入ってポスト・ロマン主義の音楽が模索されるなかで、再び作曲家たちの注目を集めるようになりました。とりわけショスタコーヴィチの『24 の前奏曲とフーガ』作品

87 は、現代ピアノ音楽の傑作の一つと考えられています。

しかし、この形式を踏襲してロマン主義の時代に書かれたいくつかの名品や、20 世紀に生み出された相当数にのぼる傑作群の存在は、十分に知られているとは言えません。本コンサートはその系譜に焦点をあて、とりわけロシア・ソ連におけるその継承と発展をたどります。

ロマン派を代表して取り上げるのは、グラズノフ(1865-1936)の『4つの前奏曲とフーガ』作品 101 から、3 番と 4 番です。この作品が書かれた 1918 年当時は、前衛的な技法の探究が活発になされていたが、グラズノフはあえて古い形式を選び、ロシア特有の重厚かつ甘美な音楽を創り上げています。

今回の目玉となるのは、スターリン政権に迫害されて不遇な生涯を過ごしたウクライナ出身の作曲家、ザデラツキー(1891-1953)の『24 の前奏曲とフーガ』です。この驚くべき音楽は、1930 年代後半にシベリアの強制収容所に送られたザデラツキーが、ピアノはもとより五線紙もなく、生還の望みもほとんどない絶望的な状況で書いたと言われています。辛うじて生き延び、持ち帰った草稿が発掘されて世界初演されたのが 2015 年のことであり、日本国内はもとより世界でもまだほとんど知られていません。全曲で約2時間におよぶ曲集から、その厳しくも美しく力強い作風をよくあらわした、13 番と 8 番の 2 曲をお聴きいただきます。

そしてショスタコーヴィチ(1906-1975)の作品 87 からは、締めくくりに置かれた 24 番を取り上げます。前奏曲の主題を引き継いだフーガは、途中から第二の主題があらわれて二重フーガとなり、最後は圧倒的なクライマックスを築きます。曲集のなかでもひととき大きな規模を持ち、単独で演奏される機会も多い作品です。

プログラムでは、これら 20 世紀の大作のあいだにバッハの作品をはさむとともに、20 世紀後半に若くして亡くなった作曲家ポルトラツキー(1949-1985)の『24 の前奏曲とフーガ』からも 2 曲の小品を取り上げます。

演奏は、いずれも日本アレンスキー協会会員の、岩本きよらさん、鈴木飛鳥さん、高橋健一郎さんです。

(文:塩野直之)

バッハの傑作群を生み出した「前奏曲とフーガ」の形式は、どのような歴史をたどって 20 世紀にいまがえったのか？

前奏曲とフーガ

～ バッハから 20 世紀へ ～

ショスタコーヴィチ
20 世紀の連作ピアノを代表する傑作

ザデラツキー
スターリンに抹殺された天才

グラズノフ
知られざる珠玉の名品

プログラム
グラズノフ「4つの前奏曲とフーガ」Op.101 より 第3番 ハ短調
ショスタコーヴィチ「24の前奏曲とフーガ」Op.87より 第24番 三短調
ザデラツキー「24の前奏曲とフーガ」より 第8番 嬰ハ短調
ポルトラツキー「24の前奏曲とフーガ」Op.17より 第16番 変ロ短調
バッハ「平均律クラヴィーア曲集」第1巻より 第1番 ハ長調 BWV 846 ... 他

演奏：岩本きよら 鈴木飛鳥 高橋健一郎
解説：塩野直之（哲学者） モデレータ：平野恵美子
後援：日本アレンスキー協会、一般社団法人 全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）、OTTAVA (http://ottava.jp)
後援：日本アレンスキー協会、一般社団法人 全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）、OTTAVA (http://ottava.jp)

■ 日時：2019 年 3 月 30 日（土）14 時半開演（14 時開場）
■ 場所：松尾ホール（東京メトロ・都営地下鉄「日比谷」駅直結） 〒100-0006 東京都千代田区有楽町一丁目5
■ 料金：一般 3000 円、学生 2000 円（全席自由）
■ チケット販売先 E-mail: zadera330@gmail.com
②（株）サワダアートプランニング 電話：078-913-3881
■ 問い合わせ E-mail: zadera330@gmail.com

コンサート情報：

『前奏曲とフーガ ～バッハから 20 世紀まで～』

日時：2019 年 3 月 30 日（土）14 時半開演（14 時開場）
場所：松尾ホール（東京メトロ・都営地下鉄「日比谷」駅直結）
<http://www.h-matsuo.co.jp/showroom/>
演奏：岩本きよら、鈴木飛鳥、高橋健一郎
解説：塩野直之（哲学者）、モデレータ：平野恵美子
後援：日本アレンスキー協会、一般社団法人 全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）、OTTAVA (<http://ottava.jp>)
フライヤーデザイン：山田大祐

料金：一般 3000 円 学生 2000 円（全席自由）
チケット販売・お問い合わせ：zadera330@gmail.com
（株）サワダアートプランニング 電話：078-913-3881
♪ 88 名様限定のホールです。ご予約はお早めに♪

丹波・タンボフ交流協会

似た名前きっかけに交流

代表団迎えタンボフ展・講演会

10 月 28 日、兵庫県丹波市の春日住民センターで、「タンバータンボフ展」という風変わった催し物が開催されました。副題は「丹波市－タンボフ市との姉妹都市提携に向けた国際交流展」とごく普通に見えますが、そのとっかかりが面白い。何せ、名前が似ていることだけをきっかけに丹波市とロシアのタンボフ市の民間交流を進め、あわよくば姉妹提携にまでもっていかうという「丹波・タンボフ交流協会」(河津雅人・V フェドートフ共同代表)の最初の交流イベントだったのです。

タンバータンボフ展では、ロシア側代表のヴィヤチェスラフ・フェドートフ氏ら一行 6 人がタンボフ市から来日し、ロシアの伝統工芸漆器「パレフ」や起き上がりこぼし「ネバリャーシュカ」、タンボフゆかりのラフマニノフの関連書籍などを持参。丹波側は丹波布の着物や禅画、京都・南丹市出身でロシア構成主義の鉄を素材とした抽象彫刻家・JUN TAMBA 氏(本名塚脇淳／神戸大学教授)の作品模型や写真などを展示し、この面でも一風変わった国際美術工芸展になりました。

同時に行われた特別講演会では約 50 名の参加者を前に、フェドートフ氏がタンボフ市の紹介を行い、JUN 氏が『創造の軌跡をたどって』と題してロシア・ペンザ市に滞在して国際彫刻シンポに参加した体験談を、そして神戸市の志水通男氏が第二次大戦後タンボフ市に抑留されていた父親と現地の少女との心温まる交流のエピソードを披露しました。

タンボフ市はモスクワから南に 450km ほど離れた位置にあるタンボフ州の州都。車なら約 6 時間、夜行列車なら 1 泊で行くことができます。古い教会や昔の貴族の暮らしがわかる博物館があり、りんごやジャガイモなどの農産物が豊富にとれる地方都市です。

丹波市は兵庫県の中央東部に位置し、東を京都府と接しています。大阪から電車で 1 時間半、人口 65000 人、丹波黒大豆や山の芋、丹波栗などこれまた豊かな農産物に恵まれた町です。

丹波・タンボフ交流協会が結成されたのは、2017 年 1 月にフェドートフ氏がインターネットで丹波市役所に送ったロシア語の新年あいさつと動画がそもそもの始まり。ロ日協会タンボフ支部長のフェドートフさんは兵庫県の地図を見ていて似た名前の町 Tamba を発見し、Tambov との姉妹提携を思い立ちました。



動画は真冬のタンボフ市の広場で同市の若い男女が AKB48 の『恋するフォーチュンクッキー』を踊るもの。姉妹都市提携を呼び掛ける熱烈な新年あいさつを突然受け取った丹波市は困惑しつつも、その手紙の翻訳をロシア語のできる河津雅人さんに依頼しました。しかし、単に名前が似ているというだけで姉妹提携ができるわけではありません。丹波市はこの申し出を断ったものの、河津さんとフェドートフさんのやり取りは続き、まずは両市の交流を民間レベルで進めようと交流協会が設立され、今回のタンバータンボフ展の開催にこぎつけたというわけです。

フェドートフさんが地図で Tamba の名前を発見するきっかけを作ったのは、志水通男さんの父・志水實一さん(故人)でした。4 年前、志水さんのもとに「ロシアの女性から『68 年前にもらった写真を返したい』と連絡があった」と外務省・厚労省を通じて連絡が入りました。ロシアから送られてきた軍服姿の父・實一さんの肖像写真が入った封筒にはフェドートフさんの手紙とロシアの新聞記事のコピーが同封されていました。新聞記事には、抑留中タンボフ市で道路工事などに従事していた實一さんら日本兵 6 人と当時 10 歳だった地元の少女との交流のほか、日本兵たちの勤勉で誇りを忘れぬ振舞いが現地の人々の心を惹きつけたことなどが書かれていました。以後、志水さんはタンボフ市を訪れるなどして、写真の持ち主やフェドートフさんとも個人的な交流を続けてきました。そうして、フェドートフさんが、實一さんの出身地である兵庫県粟粟市を地図で探しているうちに近くにある丹波市(Tamba)の名前を見つけたというわけです。

フェドートフさんは地図で Tamba の名前を見つけた時「これは運命だ」と思ったそうです。世の中には様々な偶然があるものです。しかし、偶然から新しい出会いが生まれ、お互いに見知らぬ者同士の交流が始まるのも、楽しいものです。丹波・タンボフ交流協会の活動が今後より大きく広がることを期待せずにはいられません。

なお、これもまったく偶然ですが、筆者の出身地および現住所は兵庫県丹波市であることをつけ加えておきます(それだけに、この丹波・タンボフ交流協会には個人的にも少々肩入れしたくなるのです)。(伏田昌義)



イワン・クラムスコイ「忘れぬ女(ひと)」

国立トレチャコフ美術館所蔵

ロマンティック・ロシア展

ロシア美術の殿堂 国立トレチャコフ美術館より、感動の名画が一堂来日！ 現在、東京渋谷の Bunkamura ザ・ミュージアムで 1 月 27 日まで開催されているロシア展が、このあと岡山、山形、愛媛へと巡回します。

岡山県立美術館 4 月 27 日～6 月 16 日

山形美術館 7 月 19 日～8 月 25 日

愛媛県美術館 9 月 7 日～11 月 4 日

日本語教師募集！

キルギスの 11 年生学校「ピリムカナ・カント校」

キルギスで日本語教師をやってみませんか。
 ビシケク郊外にある 11 年制学校で、日本語教師を募集しています。やる気のある人であれば、年齢、性別、学歴を問いません。給料は少なく、往復旅費も自前と、ほぼボランティアの条件ですが、教師経験を積み、ロシア語もしくはキルギス語を学習するよい機会になります。

<条件>

受入校:ピリムカナ・カント校(私立の 11 年制学校)

所在地:ビシケク郊外(バスで約 30 分)のカント市

授業数:1 授業 40 分×1 日 3 授業×週 5 日

給 料:月額 150 ドル

宿 舎:ホームステイまたは学校の寮(1 人部屋/無料)

* アパートを希望する場合は自己負担。

特 典:希望によりロシア語またはキルギス語の授業が無料で提供されます(40 分授業×週 3～4 回)。

募集人数:3～4 名

期間:19 年 9 月～20 年 6 月(希望により延長あり)

問合せ先:JIC 東京事務所 TEL:03-3355-7294

e-mail: jictokyo@jic-web.co.jp

＊＊JICのロシア語留学・研修＊＊

30 年間の実績「だから、JIC のロシア語留学」

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 30 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 3,500 名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ごとや、緊急事態の際の連絡対応など、留学される皆様をバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学 9 月生・募集中



**相談受付中！
早めにお申込みを！**

期間：2019 年 9 月 1 日より 10 ヶ月

締切：2019 年 6 月 15 日

モスクワ国立大学 847,000 円(授業料 10 ヶ月) **予価**

サンクトペテルブルグ国立大学 837,000 円(授業料 10 ヶ月)

ウラジオストク極東連邦大学 344,000 円(授業料 10 ヶ月)

ミンスク国立言語大学 335,000 円(授業料 10 ヶ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金および取得手数料などがかります。

◆JIC ロシア留学デスク◆

ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。

お気軽にお越しください。

東京事務所 平日 9:30-18:00 03-3355-7294

大阪デスク 平日 9:30-16:00 06-6944-2341

※留学相談は、必ず事前に予約してお越しください

◇◇編集後記◇◇

▼今号は、恒例の JIC スタッフ新年あいさつを中心に編集しました。「ロシアと私、私と日本」がお題ですが、それぞれのあいさつから各スタッフの個性と JIC の雰囲気を感じていただければ幸いです▼今年は日ロ平和条約交渉がよい本格的に進展することを期待します。このチャンスを逃せば次の機会はもうしばらく来ないのではないかと思います、少々過激ながら日頃考えていることをストレートに書いてみました▼人々の行き来と交流を活性化させることこそが平和な環境を整えてくれます。旅行業・観光業の役割はますます重要です。今年も JIC は微力ながら全力で日ロの人的交流、文化的交流に取り組みたいです。(F)